明治二十六年十一月廿五日發行

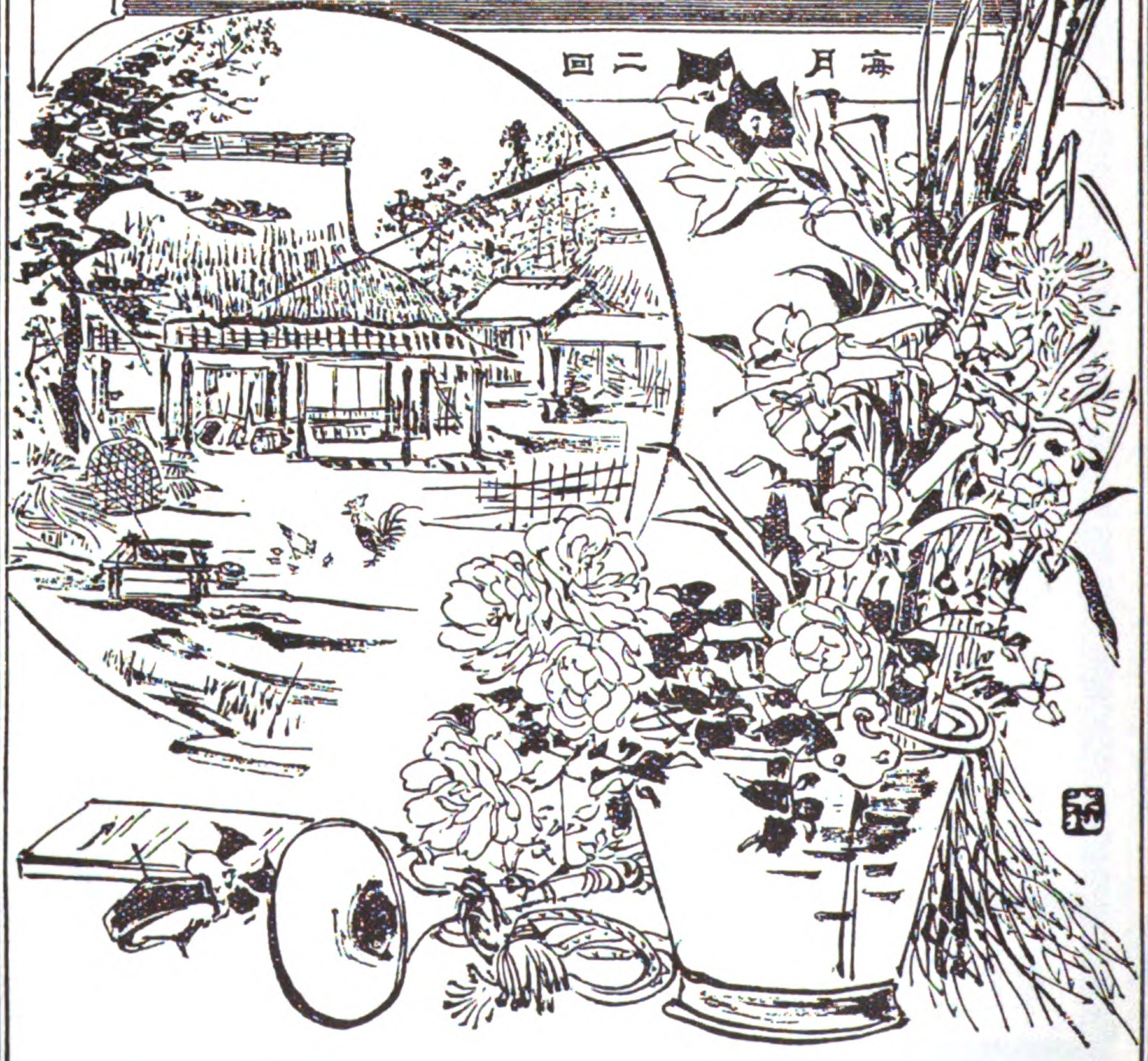
THE HOME MAGAZINE

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價全五錢

毎月二回



第拾八號

◎◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

此スコツト乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコツト乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽チ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコツト及バウン謹製

日本一手特約販賣所

横濱廿八番

神戸十七番

米國貿易商會

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコツト乳菓

民友社出版書籍目錄

每月出版　十二文豪

紙數二百頁内外
十二冊完結

十二文豪第一卷　平田久著　カーライル
定價拾八錢
郵税四錢

十二文豪第二卷　竹越與三郎著　マコウレー
定價拾八錢
郵税四錢

十二文豪第三卷　山路彌吉著　荻生徂徠
定價拾八錢
郵税四錢

十二文豪第四卷　宮崎八百吉著　ヲルヅヲルス
定價拾八錢
郵税四錢

十二文豪第五卷　高木伊作著　ゲーテ
定價拾八錢
郵税四錢

猶ほ以後出版の書名幷に著者人名は左の如し

『エマルソン』……北村門太郎
『賴山陽』……德富猪一郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎
『新井白石』……山路彌吉
『トルストイ』……德富健次郎
『近松巢林子』……塚越芳太郎
『ユーゴー』……人見一太郎

毎月出版

平民叢書

毎月一回發兌
十冊完結
紙數百五十頁

平民叢書第一卷
十九世紀之大勢
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第二卷
世界經濟上之變動
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第三卷
國家と政府
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第四卷
教育と遺傳
定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第五卷
文明之弊及其救治
定價拾貳錢
郵稅貳錢

德富猪一郎著
九版 **新日本之青年** 定價貳拾錢 郵税四錢

德富猪一郎著
再版 **國防論** 定價拾五錢 郵税貳錢

梶原保人著
政黨論 定價貳拾五錢 郵税四錢

文學博士元良勇次郎著
佛國不換紙幣發行始末幷信用論 定價拾錢 郵税貳錢

佛國ブーミー原著 深井英五譯
英米佛比較憲法論 定價貳拾錢 郵税四錢

德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫
四版 **誕生日** 定價拾五錢 郵税貳錢

人心の明鏡處世の秘寶
六版 **一語千金** 定價五錢 郵税貳錢

○發行所 東京京橋區日吉町 **民友社**

明治二十六年十一月二十五日發行

家庭雜誌第拾八號

目録



家庭雜誌第拾八號

（明治二十六年十一月二十五日發兌）

社説



子供の衣服（美服を着せしむるの害）

今や幼稚園と云ひ、小學校と云ひ、小兒小女美服の共進會とでも申す程に、各々競ふて飾り立るは、洵に嘆はしき次第ならずや。

人は生れながら美を愛する者なり。中にも小兒小女は最も美を好む者なり。彼等は他人の美はしき裝を看て、之を感じ、之を羨むと共に、自からも美はしき裝せんとを欲する情、最も熾んなり。若し父母若しくは長上たるもの、彼の小兒小女の望むまゝに打ち任せなば、彼等は十襲の錦繍に包まるゝも、それにて滿足はせざる可し。

且つ小兒小女は、美の化身なり。縱令彼等自から美服を着くるの意なきも、その父母たるものは、成る可く彼等に美はしき裝をなさしめ、可愛いらしき上にも、可愛らしからしめんとを欲するは、父母の情として免かる可らざる所ろ也。月を眺むるも、花を觀るも、如何で吾家の小兒の愛らしきに優るものあらんや。彼等が飾り立つる上にも、飾り立てんとするは、決して深く咎む可きにあらず。看よ笑ひもせず、物も語らぬ雛樣すら、彼が如く立派に裝ひ居るにあらずや。

されど父母の情の動くまに／＼、小兒小女の望むまにまに、彼等に格外の美服を着けしむるは、實に彼の小兒小女に大なる禍ひを與ふるものにして、一口にて申さば、先づ錦の袋に包みて、彼等を絞め殺すと異なるとなきは、甚だ以て心外千萬と云はざるを得ず。

今その格外なる美服を着けしむるの害の一二を語らんに、

（第一）彼等が身躰を柔弱ならしめて、大に衛生に害あり。木綿の硬きものに鍛ひ上げたる身躰と、毛皮、絹布類に纏はれたる身躰とは、恰も山中に生長したる草木と、温室に發育したる草木との相違あり。世に蒲團子と申す諺あり、況んや錦繡の兒に於てをや。

（第二）他人よりも殊更立派なる衣服を着けしむれば、彼等の心何となく高慢になり、他人を輕蔑する樣となるなり。是れは貴族的の悪德にして、無邪氣なる小兒小女には、最も速やかに此の悪德の感染し易きものなれば、隨分注意ある可きとなり。

（第三）己が欲する儘の美服を着けしむる時には、彼等は何となく我儘になり、世に克己の難有き味を知らぬことなる可し。氣隨我儘は、人間最初に來る過ちにして、亦た最後迄去らざる過ちなり。然るに父母の手によりて、此の過を招き、此の過を増長せしむるは、決してその小供を愛する道にあらざる可し。



（第四）彼等は節儉の何物たるを知らず、濫りに金錢を費すものとなる可し。子女が金錢を湯水の如く費すも、その父母が愛に溺れて、節制を加へざるより來るを知らずや。

（第五）彼等は勞作の何物たるを知らず、何事も骨を折らず。力を働らかさず。世の中の事は思ふ通りに出來るものと考へ、遂に遊惰の徒となる可し。遊惰よりして放蕩となり、不取締となり、不品行となるは、自然

の順序にあらずや。
一言にて約れば、格外の美服を小兒小女に着せしむるは、その愛する小供の肉躰にも、その精神にも、無益有害の事にして。若しそれ一家の不經濟などは、申し添ふる迄もなし。
之に反し衣服を質素にするは、身躰を健全ならしめ、他人と立て隔てなきより、自然友愛の同情を廣ふし。分限相應の制裁あれば何となく克己の修行も出來、節儉の眞味も分り、勞作の實情をも解し。何事も己が氣儘に行ふ可らず、何事も己が思ふ通りにて、手に唾して出來く可らす。唯た額に汗を流し、辛苦辛抱して、思ふ所の十分一をも達するてふ、人生處世の奥儀も、自から發明するを得るなれ。
併しながら餘り格外の粗服を着せしむるの害は、倘ほ餘り美服を着せしむる害の如し。餘り粗服を着せしむれば、無邪氣なる小兒小女は、何となく其心鄙く、貧しく、見すぼらしく、品惡くなるもの也。過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しとは、此邊の意味合と知る可し。
されば小學校なり、幼稚園なり、總ての者皆な美服を飾り立つるに、一人質素の服を着せしむることは、實際に於て甚た出來難きことなれば、各〱の父母たる方〱は篤と思ひ合せありて、一般の風習――此の惡しき風習を改たむる樣にあり度し。又た教師、保姆抔申す方々も、成る可く其の邊に注意し、能くその父母に相談して、斯の弊害を矯むる樣、甚はだ希望に堪へさる也。
古へ封建時代には、五十萬石乃至百萬石の國主にてすら、小倉袴に木綿單衣を着たるにあらずや。今日中等社會の人々が、譯もなき事に、その小兒小女を驕奢に導くとは、甚だ面白きことにあらず。
然しながら正月なり、祭禮なり、誕生日なり、それ〱晴衣を着飾り。新らしき衣物と共に、新らしき心意氣

を生し。彼の無邪氣なる小兒小女をして、健全なる悦びに入しむるは、最も喜ぶ可きとなりとす。但た平素質素なれば、晴衣も從て割合に質素なるは論を俟す。

史談

マダム、ド、スタアル　下



此華々しく男々しき婦人の一生を極簡短に摘むで云へば、千七百六十六年有名なるネツカアの女として巴里に生れ、幼にして才名佛都に轟き、二十歳にして佛京駐剳瑞典公使スタアル男爵の夫人となり、佛國婦人の花として才華巴里に輝やき、佛國革命の其始めは全心を以て革新を贊成したるも革新一變して大暴風となり、曾て女史が殊寵を受し路易十六世及后マリーアントアネツトの頭木の葉の如く飛び散るに及むで彼女は自由の名に於て爲さるゝ慘劇の慘絶なるを見るに得たへず大膽にも「女后の審判に就て」てふ一冊子を公にしてマリーアントアネツトを辨護し、大革命已に絶頂に達して所謂「恐怖の代」の始まるに及むで彼女は終に佛國を逃れて英國其他諸處に流寓し、革命の波收まりて巴里に歸つて名聲愈高く、早くナポレオンの野心を見拔ひで彼女の衝突夙に萌し、千八百〇二年ナポレオン佛國總統官となるに及むで彼女は終に巴里より追放せられ、是れより彼十九世紀の大怪物と眇たる一婦人の間に戰の續く

こと十餘年、此間彼女は瑞士意太利日耳曼露英諸邦を遊歴して到る處名士の社會に光彩を放ち幾多の著述をなし幾多の英俊を三寸の舌頭にたゝきつけ、ナポレオン倒れて巴里に歸り、ブルボン朝恢復せられて瑞士に退隱し、「余は上帝を愛せり、吾父を愛せり、自由を愛せり」との末期の言を殘して千八百十七年六十二歲を以て沒す。世に遺せる著書十八卷、逸事名言數十百條、其生くるや歐洲の社界に一段のにぎ合を添へ、其死するや佛國の歷史にマダム、ド、スタアルの字を大書して逝く。其弱點過失を控除し去るも、固に一代の名婦人たるを失はざるなり。

此は是れ唯皮相の生涯、余輩は彼女の如何なる人なりしかを知らんか爲め、同時の諸士の評言を左に揭ぐ可し。彼女の風采に就てはフエルセン記して曰く、

スタアル夫人は娘盛りの時にすら甚だ美麗ならざりし、然れども極めて怜悧にして親しむ可かりき。

ガイベル伯の言に曰く、

彼女の大なる黑き眼は天才の焔に輝やき、其漆黑の髮は涙の如く肩に落ちかゝれり。其風丰はヤサしと云はんより非凡なりと云ふ可く、一見尋常婦人に同じからざる運命を有するの人なるを知るに足れり。

ボルマン曰く、

彼女の姿は可なりによけれども、顏美ならず、顏色頗る好からず、其口やゝ尖れり。唯其快活率直にして正直誠實なるの風は、甚だ彼女をして人を惹くの力あらしむ。

女史が日耳曼に赴むきゲーテーの住むワイマアの朝廷にあらわるゝや、チーベル其風采を記して曰く、

彼女は甚だ活潑にして人のよき質なり、極めて饒舌なれども言語明晰にして聞くに面白し。彼女は世間的婦人なり、物言ふ時は大抵一坐の尤も顯貴著明なる人に對して語る、然れども何人に向ても甚だ慇懃

して、親切なり。其の眼美はうして聡明眼にあらわる、然も其顔は黒土人的の顔也。彼女は丈中人並にしてやゝ肥へ太り、眼黒く髪亦黒し。

英人カムベルは評して曰く、

彼女は英人其者の如く自由に正確に英語を使ふ。其年五十歳ばかり、中背にして屈強の軀格なり。顏の搆へ頗る大且重、上列の齒突出し、眼黒く眉甚だ濃し。

想ひ見る此容貌美ならず擧動優ならず粗豪男子に似たる巨眼廣面眉濃く齒出でし堂々たる婦人か、水色橙黄色織りまぜたる短かき羽織に同じ色の被帽を着、或は手を背に組み客間の暖爐に倚り、或は指に一紙片を撚りつゝ、眞黒に寄り集ふ男子の群に對して談論風の如く湧きし風情を。而して此男まさりの婦人も終に婦人たるを得遁れざりしにや、或時有名の天文學者フランド左る所の宴席に於てマダムドスタアルと美人の間へあるマダムレカミーアの間に坐するとて「何の幸ひぞ、才と美の間に坐するの機會を得たるとは！」と挨拶せし言葉の下より、マダムドスタアル忽ち言を挿むで曰く、シテ其何れをも有たぬ御身が！」と。彼女は才の一字を許されたるに滿足し得ざりしなり。

英國の詩人バイロン曾てスタアル女史を評して曰く、惜ひ哉、若し彼をして男子に生れしめば確に一個の大人物ならむものを」と。實に彼女は男子の才男子の氣を宿せるの婦人にして、男子にあらざれば交際の樂を覺へず、社會は彼女の空氣にして、談話は彼女の生命なりき。左れば其男子の朋友も、其巴里に於ける彼女を中心として繞れる名士の社會は言ふまでもなく、意太利のシスモンヂまた日耳曼のゲーテー、シルレル、シユレゲル、ボンステツテン及ひオーレンシラアゲル等、米國の三世大統領ゼフオルソン、またモリス、またクラソフオルド等、英國のバイロン以下無數の文字界

實行界の名士名婦、殆んど皆な彼女の知己にあらざるはなく、歐洲に於て苟くも名ある程の人物は皆多少彼女の知己朋友にして、彼女は到る處に其故人を見出せり。

談話は實に彼女の生命なりき。カルラン曰く、マダムドスタアルは話し話して己を美なるに到らしむ」と。ラッセ夫人の曰く、余若し女王なりせばマダムドスタアルをして終日談話をなさしむ可し」と。シルレルのゲーテーに寄せたる書中に云ふあり、彼女の一の欠點は其の非常に多辨なることに御坐候、彼女に從はんとせば到底聾聽器械となり了らざるを得ず候」と。其の談話の妙にして渾々盡きざることを以て知る可き也。女史曾て云へることあり、才能と會話は唯佛蘭西にのみ存在す」と。蓋し隱然自から指せる也。然もゲーテーは評して曰く、彼女は尤とも大事の問題にも瞬間の思考を與へず、尤とも深き關係ある事をば追羽子を爲すが如く輕々に話しもて去る」と。スタアル女史曾て英國の一政事家に向ひ、英國憲法の事を盡く十分間に話されよと要求せし事あり。ゲーテーの評あながちスタアル女史を嫌ふか爲めのみにあらず。

女史の筆極めて妙ならざるにあらずと雖ども、筆をとつては煖爐の緣に肱を倚せて立て語る時程巧みに其思想をあらはす能はず。眼前に聽衆なければ其混々の辭即ち涸るゝを常とせり。女史の「文學論」を著はせし時、共にありて此書につき談論せしシャチドトかの言に曰く、彼女の時に應じて話せる所は實際書籍其ものよりも遙に巧妙なりし」と。其著述としてのこるものは「盧騷の著及人物を論ずるの書」、馘られんとするの危機に臨める路易十六世の后マーリーアントアネットを辯護する爲めに公にせし「女后の審判に就て」、ナポレオンの爲めに巴里を追放せられて瑞士意太利諸邦を遊歷せる結果としてあらはれたる且つ尤も自己をあ

らはせりとの評ある小說二篇、曰く「アルフィン」、曰く「コリン」、日耳曼人民の習慣文學政論等を描きて意地惡きナポレオンの爲めに絶板されし「ド、ラ、アルレマン」、ナポレオン及其の專制を駁擊したる憤激の文字「十年の追放」、「情の勢力」「自殺論」「小說論」等の雜論文、及び其死後に世に出でたる有名なる「佛國革命に就て」等、渾て十八卷。今日に到ては多くは世に傳はらず、世人に知らるゝもの三四篇に過ぎずと雖ども、當時に在ては固に社會の驚嘆を來したるもの、且佛國文學者の之に因りて影響を受けたる者甚だ多く、要するに佛國文學に於けるスタアル女史の地位は極めて確かなり。女史は極めて社會的婦人にして尤も社會の空氣に感ずるを以て、其著述の中に於ても、親しく耳目に聞見せる所を筆にせるもの尤も優等の地位を占む。女史はガムベツタの言の如く實に大新聞記者の資格を具へたる者なりき。

女史已にあまり感情的なるに失しあまり制裁なきに失したるも、其の才辯の卓越なると共に其心の快濶にして親切なるは何人も許す所なりき。佛國革命中彼女の爲めに救はれたる者幾何なるを知らず、其英國に瑞士にあるや殊に家を開ひて亡命の士を養ひ、金を貸し金を與へて之を救へる者亦幾何なるを知らず。往々其恩を忘れて敵となりし者も、猶且憐む所あり。ベンジヤミンコンスタンの如き、即ち其一例なりき。バイロン曾てスタアル女史を評すらく、

彼女は其心を問へば誠に善良なる婦人なり、其奥底をたゞせば尤も聰明なる婦人なり、然れども彼女が何か(彼女も自から其何ものたるを知らず)ならんとの願望は即ち彼女を傷なひ了りぬ。彼女は己れの家に在ては固に親む可し、他人の家にありては人皆其の去て己が家に歸らんことを願ふ。

シスモンヂーは曰く、

マダム、ド、スタアルは未だ曾て自己を他人の位置に置く能はず。彼女の聰明を以てして終に自己以外のものを解する能はず。

曾て英國のクラップロビンソン彼女と共に日耳曼文學を講ずるに、スタアル女史終にゲーテーの卓絶なる所を解する能はざる樣に見へければ、ロビンソン大膽にも女史に謂て曰く、夫人よ、御身はゲーテーを解し得ず、御身は終にゲーテーを解し得ざる可し」と。女史直ちに答へて曰く、貴下、渾て了解す可き價値あるものは余盡く之を解す、余が解し得ざる所は解す可き價値なきもの也」と。

シルレル、曾てゲーテーに書を送つてスタアル女史を評して曰く、

彼女の氣質、感情は其所謂理學の說よりもまさり、彼女の微妙なる理解力は殆んど天才に類し候。彼女は何事も說明し觀察し測量せんと欲し、暗き所入る可からざる所あるを容さず、而して彼女か自己の炬火を以て照らし得ざる所は彼女また更に之を顧みず、要するに我等が所謂詩なるもの、彼女は更に之を認めず候。

ボンステツテンは評して曰く、

彼女は極めて良好の婦人なり、彼女の如く聰明なる者なし、然れども彼女は更に美術の感を有せず、機才にあらず雄辨にあらざる美は殆んど彼女の爲めには存在せず。

シアテドールの言に曰く、

マダム、ド、スタアルは使ひ得ざる程の敏才を有す。」

彼女は實に才を使ふ能はずして才に使はるゝか爲に、其才の卓拔にして人を見時勢を見る識見の往々にして透徹せるに拘はらず、政治に干涉して往々無用の妨碍をなし、歐洲を遍歴して時に或は名家の爲めに厄介視せらるゝものありしなり。若し男子の身を以て女史の

所行をなさば、其の生涯は必らずや更に短かゝりしならむ。

千八百〇八年女史の子息其母に知せずして窃かにナポレオンに謁し歸國の歎願をなしたるに、ナポレオン答へて曰く、

汝か母は怜悧なる婦人、極めて怜悧なる婦人なり、然れども更に訓練のなき婦人なり。彼女六ケ月も巴里にあらば、余は之を牢獄に送らざるを得ざる可し。故に汝宜しく歸て母に云ふべし、余か生きて居る限りは彼女は決して再び巴里を見るとなかる可しと。彼女若し余を攻擊するの小冊子を書かんと欲せば、羅馬チープル維納伯林ミラン里昂乃至倫敦何處に行くも可なり。余は何處に於てなりとも喜んで汝が母に面會す可し。然れども巴里に於ては決して之を許さず。

墺相メツテルニツヒまた彼女の爲めにナポレオンに乞ひし時、ナポレオン亦左の如く答へたり。

マダム、ド、スタアル若し王黨若くは共和黨たらんと欲せば、余は少しも異論を唱へざる可し。然れ共彼女は巴里のサロンを動かす所の運轉機關あり。斯る婦人は唯佛國に於て恐る可し。故に余は彼女を佛國に置くを欲せず。

以上諸名士の評を併せ見ば、マダムドスタアルの人物、其眞質、其欠點、皆一に明瞭ならん。

彼女は實に流星の如し。一點制裁の力之をひいて其軌道によらしめざりしが爲めに、其才は後世に及ぶ可き實地の功を殘す能はず、唯一瞬の光を六十年の生涯に輝めかしたるまでにて一飛空に入りて去りぬ。然れども其餘光猶没後七十餘年の今日に存するを思にゝ、彼女も亦名士名婦光を爭ふ人物の宇宙に於て決して少々の星にあらざるを知る可きのみ。

（完）

科學

人は何歳迄生くべきや

或る醫士は云へり。動物の生存する年數は、骨格の堅固となる時間の長短によりて知るを得べしと。されば象は三十年にして、始めて骨格强固となるが故に、象の生存し得べき年數は、その五倍即ち、百五十年なり。人間は二十歳にして、始めて骨格堅固となるが故に、之に五を乘せし數なる百年は生存すべき天命を有す。凡ての動物は骨の堅くなる迄の、年數を五倍せし年數を、通常生存すべき筈に作くられたるを人類が若死を爲すは、全く養生の足らざるに由ると云ふ。

これは各國人民の生存年數を比較しても一證を得べし。氣候風土によりて、生命に關係あるは自然の命にして、止なき事ながら、衛生宜しきを得し國と、然らざる國とに由り、人の生死に長短あるは然くべき現象とす。彼の美事なる珊瑚の島ありと聞こゆる印度にては、人民の生存する平均年限は、僅かに十八歳なり。十八歳と云へば未だ我が國の靑年にして、之れより社會に出でんとする蕾の頃なるを、いかにしてかく早死をなすかと云ふに、一はその國の位置赤道直下にありて、常に暖熱燒くが如く、我國の如き冬と云ふ寒き時候はなくして、彼の國の冬と云ふ時候にても、尙ほ我が國の盛夏の炎天の熱ほどありて、國人は男も女も常に裸躰にして一生を送る位の處なるが故に、その氣候が早死の一因なるは、勿論の事なれども、印度は野蠻の國にして、身躰の養生なとは少しもかまわず、又知らずして、我が國の小學校年齡に成るか、成らざる七八歳の小女は、彼の國にては最早花嫁とならざるへからず。已に十歳にもなりしものは、年齡結婚をくれたる仲間にて、我が國の三十過ぎの令孃の如く、急ぎて又あわ

て、結婚を求むると云ふ。此く食物の身躰に及ぼす影響もしくは勞働が、如何程筋骨に關係あるかと云ふ事は、殆ど考ふる人もなき有様なるが故に、かくは早死に至るものなり。之に引き變へ英國は文化開けて衛生の法宜しきを得たれば、生存の年齡平均四十歲なり。日本は英國に及ばざる事八年、即ち三十二歲にして、死するの割合なり。かく養生衛生は、人類に大なる關係を有するを知らば、百歲の長壽を保たんとを欲するものは、先づ養生衛生に注意すべきなり。

養生と云へば際限広き語にて、熱病の者を明るき室に置くは眼病の原因となり、寒中に火鉢を室内に入るゝには、炭を能くおこして赤くなりたるものを用ゆるにあらざれば、亞酸化炭素と云ふ毒物發して、大に人の肺を害するとを心得るが如き、此頃時候のものなる茸の有毒なるや否やを試むるには、銀の簪、若しくは煙管の如き銀塊を投じて、銀の色黒くなる時は、有害物にして、銀色變わらざれば、無害なるを知るが如き、若しくは金ものにて歯の垢を堀るによりて、大に歯を害するが如き事等を、一々心得て、日々に起る事物につれて、小なる事より、大なる事迄、養生に注意するとなり。之を知るには豫て學術雜誌の如きもの、或は衛生に關する書物等を讀みて、淺くとも廣く心得おくこそ肝要なれ。

紀念の古木（木の年齡）

かど松は冥土の旅の一里塚と、古人も云ひし如く、人間は正月の來る毎に、一年つゝ年を取れども、樫の木は、人間の百年毎に一度つゝの年齡を加ふ。されば百年にては樫の木は、漸やく若か木の仲間に入り、五百年にては未だ中年の仲間に入るや入らずの頃にして、六百年も立たば、始めて林の大王となる。我等、樫の老人が子孫に語る茶話を解するか、さな

くば樫に人間の舌を貸して、人語を語らしむるを得ば、人間の未だ知らざる歴史を面白く傳ふるを得ん。日本紀、筑後風土記等を讀み給ふ人々は知り給へるならん。筑後の國に一本の櫪ありて、長さ九百七十丈に達し、廣がりたる枝葉の影、朝には肥前の嶽をかくし、夕には肥後の山をおほへりと。又近江に在る柞樹は、幹の圍り五百ひろ、朝に丹波の國を隠くし夕には伊勢の國を蔽へりと、近江風土記に記されたり。

千八百八十三年に英國にて伐られたり白樫十二本ありしが、何れも五百二十五年の年數を隔しものにて、各々一丈二尺の長さありて、幹の直徑六尺の ものありき。此木は五百年を隔しものから、其時は我等が祖父の祖父も、その祖父も、二十代前の祖父も、未だ世にあらざりき。今日その木を切りたりと假定せば、その木は楠正行の四條畷に討死し、足利義滿の金閣寺を立て、驕奢を極めし頃に植られし木なり。

米國カリホルニヤにありし水松の木は、實に一千一百二十年の長壽を保ちしとて、人々驚けども、英國にては倘ほめづらしき樫林あり。彼の我等が萬國歴史にてその名を聞しウヰリヤム大王が殊更に寵愛し給ひて、自から手植になし給ひし木を大膽なるノルマン人が第一に分取りし林あり。强健なるサクソン人はノルマン人と戰ひ、勝つものは勝ち、負くるものは負け、王も兵士も、名譽も、時代も、僅かに歴史に名を止めて消え失せしも、ウヰリヤム大王が喜んでその蔭に息ひ給ひし樫の林は、今に依然として古色を帶びて立てり。之を見るもの、そゞろに昔忍ばれて面白くも又哀れにぞある。

是等よりも倘ほ古きは、ロンドンの片田舎なるタロイドンと云ふ處にある樫木なり。植物學者の鑑定に由るに、この木の年齢は少なくとも一千四百年なるべしと云ふ。されば彼のローマ帝國を設立せんための幾個の

兵士が血にまみれたる劍をひつさげ、よろめきつゝその林の小道を通行せし時、冷然として立ちて眺め居たりし樫は、十四世紀の變遷を均しく冷やかに眺めて、尚今日も立てりとは、驚くべきことにあらずや。

木の話を爲すに當りては、我等が忘るべからざる一木あり。國會の樫と云ふ。思ひ起せば十三世紀の頃にてありき、英國を支配せしエドワード一世が、その木の下にて國會を開き、數百の人はその枝の蔭に暑さを忍びしと云ふ。これは少なくとも千五百年は經過せしものなり。

猶太のレバノン山上に五六本の水松ありしが、その一本を伐りて年數を算へしに、三千五百年の齡を保ちしものにて、かの聖書に記るされたるレバノン山の時代に生せしものなりと云ふ。

尚ほ有名なる佛國植物學者は「ベオバブ」の木に付て、種々の觀測をなせし中に、殆ど不思議と呼べきものを發見したり。ある「ベオバブ」の木は最早周圍の腐敗せし處を除きたるも尚ほ百九十尺の周圍ありて、實に五千年餘の老木なりと云ふ。林の帝王が、人間の歷史の物足らざるを笑ふと云へるも、大言にはあらずと云ふべし。

人の外にも世界あり

英語の虫類と云ふ言はラテン語の『片れ〳〵』と云ふ言より來れりと云へるが、成程虫類の躰は、大抵横にすじありて、環の如きものゝ連なりて形をなせり。偖て水中に棲む虫、空中を飛ぶ虫、地上に生育せる虫等を、一々集めんには、實に四十萬の種類を得べし。而して我等が家の中にも、庭の中にも、林にも、野にも、至る處に見る虫類は、各々一つの職分を有せるは、不思議と云ふべけれ。

今一匹の馬の死せしとせよ。之を捨て置かば、『腐敗の肉は空氣を腐敗せしめん。然るに小蜂あり、先づ來りて馬の肉に穴を穿みかゝる間に幾百の蠅は臭ひをかぎて來り、見る間に卵を以て全躰を掩はんとす。蠅の種類の中には、一時間に二十萬の卵を生み付くるものあり。蠅の卵は人の子の如く成長に時間を費やさゞれば、生れ出づるや否やむら〳〵と匐ひ出し、自分にて一人前の生活をなし、二十四時間の間にその重量の増加すること、生時の二百倍なり。この割合にて腐食するが故に、死したる馬の柔らかき肉は、間もなく食し盡されたる頃、蟻、熊蜂、密蜂は、骨迄も殘らずさらへ去るに至る。木の倒れたる時も、又此の如し、職分を有する虫共が、少しもすかさず木身に穴をあけ、天に聳へし大木も、またゝく間に埃となりて、足に踏まるゝに至る。虫なくば鳥類も生活を爲し得ず、虫なくば空氣も清かなる能わず、虫なくば水も良水となるを得ず、魚も棲まず、虫なくば人類の世界は如何に不幸を來すべきか。

かく職掌のみに務めて怠らざる虫類は、如何なる腦を有せりやと云ふに、誠に小さき腦を有して、その腦より白き糸の如きもの、躰の諸關節に聯接せり。これ神系なり。面白きはその肺なり。虫の背に二本の長き管あり。その管の外には、又更らに細き管の幾個ともなく通りたるが、これ虫類の肺臓なり。おかしきは虫は口にて呼吸せざる事なり。口にて呼吸せざるかわりに、虫類は凡て躰の兩側に小さき穴ありて、之より呼吸をなせるが通常は九個の穴あり、その心臓は一つの長き管にして、背の皮の下に横わり、管の横側には無數の小さき穴ありて、之より全躰に液を配布す。されどその兩端は液汁の流出を止むるために、戸びらの如きものありて、之が蓋をなせり。尙ほ管の中には五六の境ありて、中を分界せり。その分界毎に一づゝの扇あ

りて、液の進む時は開き、退かんとする時は閉ちて、人類の心臓に能く似たり。虫類の血液は、白色もしくは黄色にて、心臓より進み、流れて頭に入り、それより出で、躰を廻ぐり、躰中の空氣に觸れて、再たび清潔なる有益の液となる。

大抵の虫類は年齢によりて、その形を變ずるを常とし、例へば毛虫の如きは充分に成長せば、皮をぬぎて、遂には食を絶ちてさなきとなり、殆ど生命のなき圓錐形のものとなり、頭もなく、尻もなき棒の如きものとなる。暫らく休みたる後に、漸々内部の運動を生じ、内部の運動のために艶々しき外皮は破烈して、そこより蛾虫若しくは蝶を出し、柔らかき羽翼出で見るまに漸々固くなり、殻に暇を告げて、空中に飛び去るなり。蛙の如きも殆ど全しき二三の經過を有せり。始め卵にて在る間は、半透明の物質に包まれたるが、次第に半透明の物質は少なくなり、遂に尾の長き、所謂おたまじやくしとなり、水上にては空氣を吸ひ、水中にては水に生活し、両棲虫となり、一變して又蛙となる。

尚ほ異なりたるさまは、蚊及び蜻蛉等によりて見るを得べし。河溝の中に六個の足を備へ、たけ低くして躰短かく、匍匐して棲息する虫の皮をはきて羽翼を生じて、蜻蛉となり、ぼうふらの變じて蚊となるが如し。

以上を見ても知るべし。概ね虫類の一生は、三時代に分るを得。第一は能く食し、能く成長し、度々皮を更ゆる羽のなき時代。次ぎは食慾なくして死するが如く眠むるの時代。次ぎは皮を更へて羽を生じ、通常は卵を生みて、たゞちに死する短かき時代。

されど蜂蟻等の如く、社會を爲して生活し、互に相助け、助けられて生活する物は、生存の時期他に比して、最も長きは妙と云ふべし。

此の外目も口も殆どなく植物に近き動物もあり。或は殆ど魚鳥の属にも入らんかと疑ふ計りなる虫もあり。

我等の外の世界の廣きことは計り知るべからず。

文藝

濱なでしこ

藤島ゆき子

下

音讀む窓をとざしはて
　籬隔てし友どちを
呼いて庭に下り立ちつ
　池のみぎはの松が枝の
緑りのかげにやすらへば
　秋の夕の空澄みて
萩に置く露荻の風
　月のながめもおもしろく
葉末にすだく虫の音の
　身にしみそめてあはれなり
友がかざしゝなでしこの
　たえなる花を見るにつけ
月のひかりの照り添ひて
　たえなる色を見るにつけ
『思へば出る去年の今日
　田越の浦を吹く風の
袂すゞしき磯ばたを
　親しき友と打つれて
たちもどおりつふくるまで
　月見し夜半の樂しさは
たとふるものもあらざりき
　海のあなたをながむれば
魚とる舟か夜をこめて
　葉山の沖のをちこちに
いざり火の影おもしろく

待つに程なく山の端を
いて來る月のうつりては
みぎはに寄する白波も
花か雪かとまがひにき
その清き夜に今日のごと
君しましなばいかばかり
嬉しかりけん來ん年の
今宵の月はもろともに
かしこの濱にながめなん』
『我もさこそは思へども
我もさこそは思へども
『小貝なでしことり／＼に
たのしき事の數多し
いぬる日君の美くしと
めでたまひにし梅貝も
かしこの濱にさはなれば
拾ひて入れん花がたみ
同じさまにや作らまし』
『我もさこそは思へども
我もさこそは思へども
そのおもしろき浦景色
訪はんとすればなか／＼に
思ひのたねや數添へん』
見ぬは見るよりますかゝみ
くもりがちなる言の葉の
葉末に落つる一雫
いぶかしみつゝよく問へば
『いとはづかしき事ながら
ふりわけがみの昔より
むつびあひにし兄君
身にいたつきのあれば迚
田越の浦にたゞ一人

旅立ちましゝ去年の夏
かたみにしのぶ玉章も
數多みてはおさめにき
文箱も半みちしころ
みちにしころよ何にしけん
いつかたよりの中たえて
とへどとへども答とて
にはかにあらずなり行きぬ
あまりの事にもしや又
病あつきにあらずやと
家の子二人をくりしが
此日の宵は人々の
起居のさまも常ならず
いともあやしく思はれて
問へど誰とて故よしを
語るものこそあらざれば
かなたの空をながめやり
今日はたよりの來れかし
明日は知らせのあれかしと
指をりかぞへ待ちわびて
十日となりし其夕
思ひ出るも恨めしや
語り出るもうれはしや
歸り來ませし家の子を
待つにかひなき世なりけり
あゝ我友よゆるせかし
思ひ出れば今も猶
胸くるわしき心地なり
歎きたまひし父母の
此夜のさまのいまもなほ
我が目の前に見ゆるなり
如何なる故のあればにや

兄の君は忽ちに
狂ひ〳〵て行くさきの
　雲を霞のあてもなく
尋ねまはれど今日までも
　知るべきすべはあらぬなり
つらきおもひを此頃は
　このなでしこに語るのみ
つらき思ひをこのごろは
　このなでしこにかたるのみ
田越の浦の浦波に
　こがれゆきかふあま小舟
打ながめつゝ朝な〳〵
　手折りし花と聞くがまゝ
いづこにあるもいつとても
　胸にかざしゝ撫子を
せめては人と思ふなり

　兄の君と思ふなり」
思ひもよらぬものがたり
　聞くさへ我はむねにまづ
驚ろかれぬる今宵かな
　今も忘れぬ彼の乙女
かのあやしげの少年が
　去年我がこゝに住みてより
年も同じき隣りどち
　嬉しく結ぶ友垣の
今日このごろははらからと
　かたみにちぎる其人の
兄の君にませしとは
　いぶかしき世のさにしかも
狂ひし人の心をば
　知る人なしと友はいへ
我は知れどもなまなかに

語りいでなばいとゞいなは
人の歎きのまさるらし
それとはなしに立別れ
又明日の日をちぎりつゝ
出で行く人を見送るに
胸にかざしゝ撫子の
花にも涙かゝりけり

熊及びおさな子

アフデーフ氏作
嵯峨のや主人譯

ある所に富める農夫ありたるが、夫婦の中に一人の女の子を設け、其名を玉坊と附て蝶よ花よと愛くしみ、荒き風にも當てず、恩愛の懐の中に最温に育てけり、扨光陰は矢の如く、玉も今年は早五歳となりたるが、誠に美しい、元氣のよい、利口の可愛らしい子にて有りき、ある日の事なり、玉坊大勢の朋友と林の中へ遊びに往きたるが、名も知れぬ種々の花の奇麗に咲けるを見て其を折り、名も知れぬ種々の



鳥の木より木に飛うつりて、愛らしい歌をちよ〳〵と歌ふが心面白く、名も知れぬ種々の木の實草の實が、澤山手の届く所にあるに魂もうかれて、其をもぎ取る事に夢中となり、歸るを忘れて次第に林ふかく入込みたり、折しも彼方なる木下陰より、不意に一疋の大な熊飛出しぬ。子供等は驚きて一散に逃出したるが、玉坊は一番年下なれば逃おくれて頸首をむづと引つかま

れぬ、逃歸りし小兒等、此事の玉の兩親に語りければ、兩親の驚きは如何斗、大變に歎き悲しみしが、迚も熊にさらわれては、命の助かるべき樣もなしとあきらめ、其日を命日と定めて、玉坊の訪弔をなしける。話かはりて玉坊は熊にさらわれたれば、定めて喰殺される事であらうと思ひて悲しみ泣きしが、熊は玉坊を喰もせず、さツ〳〵と擔ぎて己の住む穴の前まで來り、其處へよいとらさと玉坊をおろしける。玉坊は四下を見ると木蔭に深く、木の根の下に奧深き大なる穴ありて、物寂しき所なれば、怖さ、恐ろしさ言はん方なく、父上樣や母上樣やと聲を擧て泣き叫びたりき、其時熊は笑ひながら、おい玉坊や、予はお前を喰はしないから泣くのではないよ、予は一人で寂しくて不可から、お前と一所に遊ばうと思ッて、其で態々伴て來たのだ、だから泣くのではない、何でもお前の好な物をあげるから、何が宜、果物を取てあげやう歟、などゝ種々に玉坊をすかして機嫌を取りける、玉坊はやう〳〵少し安心したものゝ、さりとて寂しき山中に恐ろしき熊と一所に住むなれば、悲しき事言はん方なし、其にひき替て熊は今まで一人で居た所、玉坊といふ遊び相手が出來たので嬉しくてならず、玉坊に木實を取てやらんと思ひ、其身の力のあるに任せて、木などは根ごきに引抜き、有丈取て玉坊にやり自分も食ひける。熊は元より狼の如く貪る心もなく、狐の如くわる狡こき性質もなく、虎の如く猛き心もなく、寧ち魯鈍の性質にて、餘程おんとうの馬鹿者なれば、今年木を引抜く時は、來年はもう果實を得る事の出來ぬなどゝいふ事には考へ及ばざりき。玉坊は夏より秋へかけて二ヶ月餘り、熊と一所に住み居たるが、ある時熊のいふには、おい玉坊、予は今日どッさりおいしい木の實を取て來て、お前のお父樣やお母樣に持て往てやらうと思ふのだ、少しの中淋しからうが待てお居でよ、と言ひすてゝ出

でゆきける。
玉坊は熊が居らざれば、此間に家へ歸りたしと思ひたれど、道を知らざれば歸るにも歸られず、父様母様の事思ひ出して我家戀しく、如何にせば宜らん歟と考へ居たるが、小兒ながらも利口の子なれば、ふと心附きて、熊の爲めには唯一ッの寶なる、大きな袋の中へかくれて臥て居りけり。暫くして熊はどッさり木果を取て歸り來りしが、玉坊が居らぬに驚きて、玉坊、玉坊と呼んで見たれど返辭なければ、扨は予が居ないので寂しがり、其處等を探し歩て居るので有らう、定めし今に歸ッて來やうで、予は其間に玉坊の家まで往て來やう、と例の袋の中へ、玉坊の臥て居るとは知らず、取て來た木果を溢る斗つめて、よいこらさと擔で出かけける。玉坊は袋の中で此様子を知て、扨は今日こそ家へ歸る事が出來ると思ひて、窃に嬉し喜びける。然るに熊は餘程歩きたりと思ひし頃、道の眞中に立止まりて、嗚呼くたびれた〳〵、此様重い木實は今まで予はかついだ事がない、おかしく重い木果だぞ、此様に重くては持て熊往くのは厭だ、予が此處で皆喫てしまはうと、獨語を言ひながらどッこいしよと木の根へ腰をかけける。玉坊袋の中で之を聞き、之は大變だと思ひ、細い聲を出して、

熊や袋を開くなよ
熊や樹果をたべるなよ
玉坊の家は直そこだ
もう〳〵少しのしんぼうぞ

と歌ひける。熊は之を聞くと袋の口を開く事をやめ、又やッこらさとかついで行けり、暫らくは擔てゆきたるが、又立止まりて、嗚呼くたびれた〳〵、此様重い樹果は、今迄予は擔いだ事がない、おかしく重い樹果だぞ、此様に重くては持てゆくのは厭だ、此處で予が皆喫てしまはう、と獨語を言ひながら、どッこいしよ

と木根へ腰を打かけける、玉坊之を聞て大變だと思ひ、袋の中から細い聲を出して、

熊や袋を開くなよ
熊や樹果をたべるなよ
玉坊の家は直そこだ
もう〳〵少しのしんぼうぞ

と歌ひたり、熊は之を聞くと樹果を喫る事を思ひ止まり、又やッこらさと袋をかつぎて、玉坊の家をさして出かけたり、今度は往く事僅にして玉坊の家へ着たるが、折しも夜の事とて、門が閉て在たれば、熊は前脚を擧て門の戸をどん〳〵と叩きぬ。玉坊の兩親は之を聞き附て、作男を呼び覺まして門を開かせぬ、作男はぶつ〳〵と口小言を言ひながら起出て門を開き、さあ這入らッせへと寐ぼけ眼をこすりて居る時しも、數疋の飼犬熊の姿を見て、怪しい奴とわん〳〵〳〵、四方より吠立たので熊はびッくり、袋を投出したまゝ一目散、林をさして逃歸りぬ、犬の吠ゆるに驚きて何事ならんと夫婦の者も起て來しが、此時袋の中より玉坊飛び出して、父樣母樣と言ひてすがり附きぬ。死しゝと思ひし玉、生て再び我家へ戻りしなれば、夢ではなき歟と夫婦の喜び、右左より、玉やお前まあよく歸て來てと言ひさしたまゝ後は言ひ得ず、抱きかかへて嬉し泣きに泣きける。玉は有し事共を語りたれば、兩親は聞く事毎に驚歎して、我子の幸を神に祈りける、然し玉は利口者なれば、ひよッとして熊が怒て來なければ宜がと案じて居たりき、然るに五六日を過ぎしある日の夜半の事なり、門の戸をどん〳〵と叩く者のあるに、兩親は目さめて、おやまた誰か來て門を叩く、誰だらう、と言へる時、玉坊のいふには、父上樣、あれは熊ですよ。なに？熊だ？其ではお前が逃て來たのを怒ッて食ひに來たのだらう、宜よ、お前を食はせてたまるもの歟、お前は花ならまだ蕾、行末の長い躰だ、私等

はもう年寄、いつ死んでも宜のだ、予がお前の代りに食はれやう。あれ、お父様、勿躰ない、私がたべられるから宜ござんす、と言ひ捨たまゝ表へ飛出し、門を開けば、果せる哉、熊がすッくと立て居りたり。

おや、熊や御機嫌よう。

おや玉坊歟御機嫌よう、予はお前に告別に來たのだよ、今度遠い所へ引越をするから、もう予は是でお前には遇はない、さあ之はおみやだ、

と何を歟入れた大きな袋をそこへ投出し、

其では御機嫌よう。

玉も今更名殘おしく

其では御機嫌よう。

熊はさりぬ。後で袋を開きて見たれば、其中には美しき樹果の數々、一同打寄りて舌皷をうちけるとぞ、是でおしまひ。

寓意詩

クルイロウフ氏作

笛仙子譯

獸狩の獅子

犬と獅子、と狼、と狐、と如何いふ理歟隣合て住んで居た、而して此樣約束をした、獸狩は互に知らせ合ひ、獲物は等分に分けやうと。其から後のいさくさは私も知らないが、斯いふ事丈は知て居る、第一番に狐が鹿を狩得たので、朋友の所へ使節を立て、獲物を分けやうと言てやッた。獲物は眞にわるくないのだ。で皆やッて來た、獅子も來たな、獅子は爪をそいと立て、坐中をじッと睨み廻はして、獲物の分方を見積ッて居たが、やがていふには、おい兄弟、四ッに分るのだな、よし、と鹿を四にひき裂きて、さあ分るから見てお居で、宜かい、此丈は約束通り予のだよ、其から

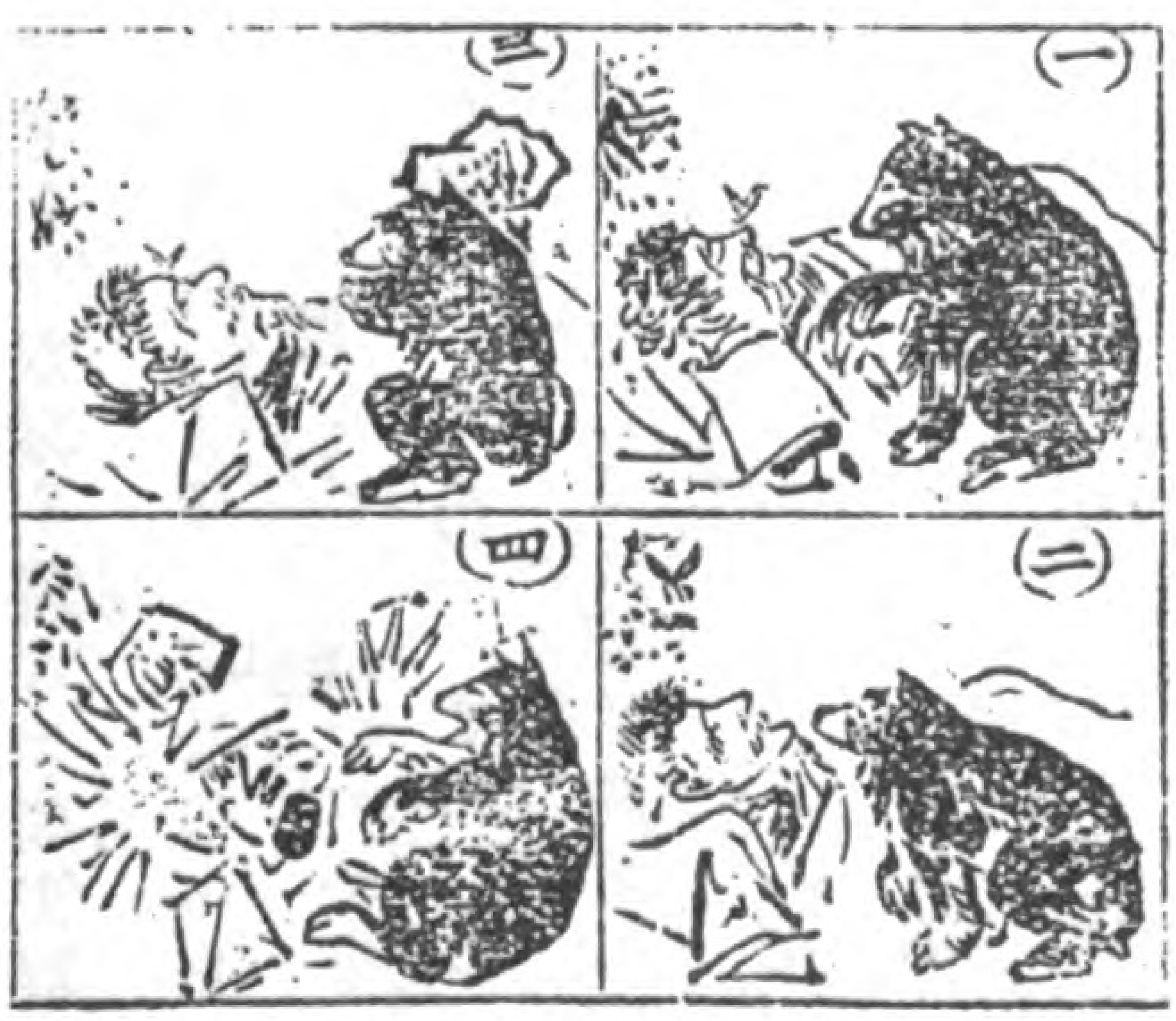


此方は、予が獅子だから、無論予のと、其から又此方は、予が一番强いから予のと、宜かい、其から誰でも之へ、一寸でも手を(其實足を)かけやうものなら、其者は生て其場から立てないのだ。

隱者及び熊

他人の世話親切は有難いが、其も誰彼なしに受る事は出來ない何卒神よ、馬鹿とかゝり合のない樣に願ふ、世話好の馬鹿は敵よりもこわいから。

ある市遠き片鄙に身寄親類も何もない一人者の隱者が住んで居た、本なぞには浮世を離れた生活は、さも樂じさうに書てあるが、其實一人ぼッちの山住居は、誰にても出來るとは言はれない、苦樂を他人と分つのが全躰人間には面白いのだ、或人が私に言ッた、なんの、森や、岡や、野や、綠の草が、幾ら奇麗だと言ッて、話相手が無ッた日には、退屈で退屈でたまるもの歟と實に其通りだ、我隱者も永らくの一人ぼッちで、躰底あきゝゝしてしまッた。で隣家があるなら其處を訪づれて、誰でも宜から近附にならうと、林の中へ這入て往ッた。然し熊歟狼の外、林の中に誰が居やうぞ。



否冗談ではない、隱者は大きな熊に出ッくはした、が仕方がない、愛らしい隣人に帽子を取て御挨拶だ、隣人は手を(其實足)出して握手の眞似だ、互にかはした一言二言、其が緣で知己となり、其からとうゝゝ朋友となッて、終には片時も傍を離れず、一日一所に暮す樣になッた、扨さ

うなッてからは何をして遊んで居たか、何の話を話して居た歟、世話物話歟、馬鹿ッ話歟、隱者は全躰口無調法、熊は生來が無口だから、何の評判記歟分らない、が兎に角何歟蚊に歟話して居た、其に何はしかれ、神が好朋友を授けて下されたと、隱者甚だ大恐悦で、何處へても熊と一所だ熊が居なければ寂しいから、片時も傍を離れはしない、或日の事であッた、二人は森はござれ、野はござれ、谷はござれ、山はござれ、何處へでもかまはずぶらつかうと言て家を出かけた、然し人間は全躰熊より弱い、から隱者ももう熊より先へつかれて、少々おくれ勝になッて來た、すると熊は後より返ッて、ずッと旅馴れた面つきで、おい兄弟、其處等へ轉がッて休んでは如何だい、何なら臥なされ、予が番をして居るから、隱者は他の言ふ事をよくきく男だから、ごろりと轉がるともう高いびき、直に眠て仕舞ッた、其處で熊は番兵だ、然し案外に閑でもない、見ると朋友の鼻へ蠅がとまッた、五月蠅から、拂ッてやッた、見ると今度は頬へ來てとまッた、直追拂ッた、おや又鼻へ來てとまッた、えゝしつッこい、段々うるさくなッて來た、おや此畜生見れば洒唖々々と額へとまッて居る、熊はもう業をにやしきッて、じッと睨み付ながら一言も言はず、大きな石を靜つかんで、立膝をして息を殺しながら、見やがれ、うぬ、今予が打殺してやるから、とじッと朋友の額の蠅を狙ッて、力の有ッ丈、エイト一聲、額へ石を叩き附た、投方が實に巧かッたので、腦骨一度に碎けて、熊の朋友はとう／＼其處に往生した。

內助

土佐山內家の祖先猪右衞門一豐といひしは、其初至て微なるものなりしが、織田信長に仕へて追々立身し

遂に豐臣氏を經て德川氏に至り、海南の大諸侯として德惠兒孫に垂るゝに及びぬ。

彼が此くの如き出世をなしたりしは、もとより其才勇に因りたりとはいへ、彼に立身の機會を與へ、彼を勵まし、彼を助けて、彼をして是に至らしめたるは實に彼が妻の力にあらずんばあらざりき。

彼が初めて世に立ちし頃は、天下正に戰國にして日として干戈の聲を聞ざるはなかりし。されば此時に當て身を立て名を成さんとするものは戰鬪に趨るにあらざれば能はず、而して戰鬪に趨るに必ずなかるべからざるは武具と戰馬なりき。

斯くて彼は一夕獨り物思はしげに坐しつゝ歎息の聲を漏したる事ありき。『馬さへ良からんには、出世の手蔓はあるべきに、悲しきものは貧の苦みなり』と。蓋し此時に偶々名馬の賣られんとするものありたるなり。

而して此の歎息をほの聞きたる彼が妻は直ちに起て其鏡臺を開きつゝ、一包の黄金を出し、來て之を其良人の前に置きぬ。

彼女の良人は驚けり、喜へり、且怪めり、何を以て彼女はかゝる大金を藏し得たりしかと。

然れども怪しむべき事はあらざりしなり。彼女是より先始めて彼女の良人の家に歸くに當りて、彼女の父より一包の黄金を贈られき。而して良人の大事に逢ひて之を出せと命せられき。然るを彼女は今則ち之を出したるなり。

用ふべからざる所に用ひずして用ふべき所に用ふるは蓋し財の用ふる方なり。彼れ一豐が妻の平昔貧苦に迫りながら、空しく之を衣食の費に用ふるをなさずして、而して一旦之を出して能く其良人の出世を作り出だせしもの、洵に善く乃父の賜を用ひたりといふべし。

此一事を以て之を觀るも、彼が身を一國の大守に致し

たるは彼女の力與て如何に大なりし乎を知るに足りなん。

繪畫

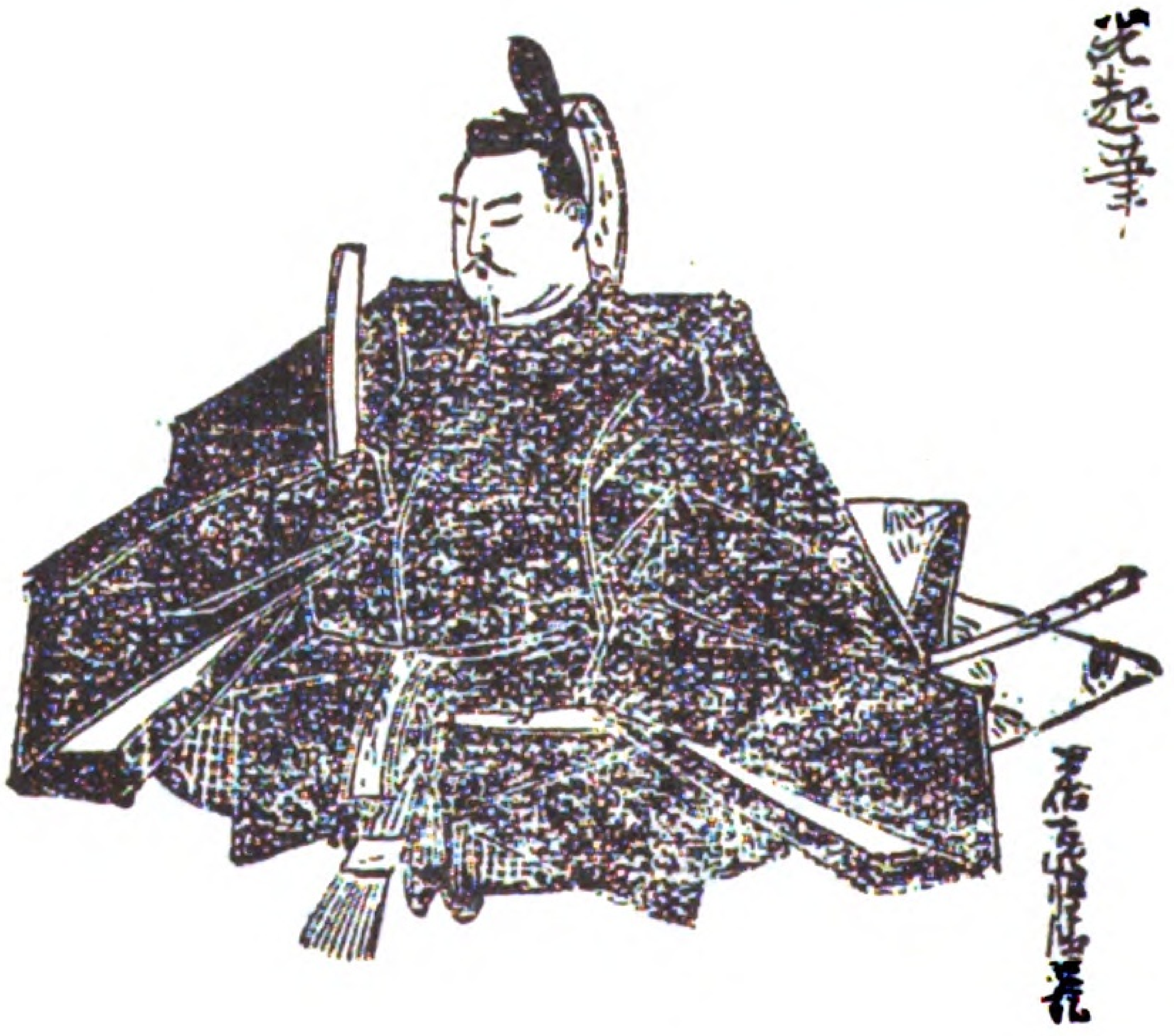
無聲詩話

（八）

王朝の繪畫は巨勢氏土佐氏の繪畫にして二者各其長所を同ふせざるありと雖、共に時の優柔華美なるにつれて金碧燦爛自ら軟種のものなりき。然るに物換り星移りて世は武門の世となり、室町氏の時に至り、義持義政奢侈遊宴を事として大に書畫を奬勵するに及び、日本美術は爲に端りなくも干戈の間に一大光彩を放ち、以て新時代の朝景色を裝ひぬ。

王朝繪畫の帝王たりし土佐繪は新なる土佐繪として大に起れり。禪學の發達と宋畫の輸入とによりて硬種の新畫は大に出でたり。

試に其一斑を叙すれば、其一方に於ける新なる土佐繪は光信光起の興るによりて一世に炳然となりぬ。



光信は行秀の孫彈正忠廣周の子なり、左近將監刑部大輔に任じ、畫所頭となり從四位に叙せり、足利義敎の時に生れ、大永四年足利義晴の世に九十二歳を以て沒しぬ。古法眼狩野元信と其時を同ふし、共に一世の畫宗たり。

彼が畫は氣韻を主として形似を後にしぬ。曾て家學を脩め、又古來の名家信實覺融巨勢宅間住吉の蹟を究め、土佐家を中興して、纖麗の筆に一種硬性の韻致を添へ以て新土佐繪を作りき。後世稱して畫聖となし、基光及び光起を併せて土佐の三筆と唱ふ。

其畫く所源氏屏風、誓願寺緣起、福富艸紙、一の谷八島合戰の圖、羅漢、佛像、鼠艸紙、狐鶴等の艸紙の如き、皆世に傳へて珍品とす、近世漆器の描金衣紋の描花等多くは彼が畫法に資るといふ。

光起は江戸三四世の時の人にして狩野探幽と同時代なり。土佐家掉尾の大家とす。

光信の子光茂、光茂の子光吉、光吉の子光則、光則の子は則ち光起なり。年二十二にして父に別れ、初め祖父光吉の門人に就て畫法を學び、後自ら研究して和漢名家の秘奥を探り、遂に當時の畫仙となりぬ。其畫光信が氣韻を主とせる後を承け、專ら力を寫實に用ひ、筆力精妙にして生けるが如く、土佐家中の寫實派なり。

遺畫は源氏の圖歌仙緣起より花鳥風月宮殿樓閣等其數甚だ多し。

家政

交際の心得。

或る家の老人に問ひて、御内の令嬢は、如何にして女學校へは、入學なさせ給わざる、一科づゝに教師を撰びて學び給ふは、時間も、學資も、不經濟に候はずやと云ひけるに、否とよ女學校に入れんには人に對して挨拶の出來ざる片輪者となるに由り、むしろ不完全なる學問を、不經濟に學ばしても、一通りの人間となすには若かざるなりと。これは女學の反動熱に浮かされたる人々の小言にして、取るに足らずと雖ども、かゝる

小言の所々より出づる時は、婦人教育の進歩を害するの恐あれば、女學校にして、客に應接する時の心得等は、時々講話ありて、常に世間より離れざる樣に敎育することこそ良けれ。客の應接とて、左程むつかしき事にあらず。客は家により、類により、等により、種々差別あれば、その客に應對する法方は、一々異なるべけれども、要するに眞實を以て、交際するを第一とす。」眞實なければお世事を並べたりとも、客の興にならざるのみか、反て客の氣を害なふとあり。例とへ口不調法なりとも、眞實を以て客に對する時は、何となく坐温かき心地あるもの也。されば心易すき來客に當りては、何の美味なるもなきに、晝時となり困りたる如き場合には、殊更煮豆にても、漬物にても、有り合ふものにて膳を作り、美味なきをことわりて、之を供するは、知らぬ顏に返すに比して、如何計り愛想あるべき。中には愛想を作りて、心にもなき事を言ふ人あり。此の頃團子坂の菊は美事のよしに侍べれば、一度御伴仕つらんと欲して候ひしが、生憎風邪して候へば、未だ御伴を得ず候と、美わしく口には言へども、其實昨日已に獨りにて團子坂に遊びて來りしを、遙かに客の見たりし時の如きは、所謂水臭き挨拶なるのみならず、反て人をして不快の心を起さしむ。

殊に多人數の來客に對して、注意すべき一事あり。五六の人一時に訪問ありたる折は、己れの話しの合ふ人とは終始話しをなして、傍の人々は始より默して、終る事のなき樣、心して滿遍なく話しの問題を仕かくべし。又心すべきはその問題の成るべく込入らずして、一同に興味ある問を出すべし。文學客なりとて、文學の事を悉しく語らば、他の人は解からず、敎育家のみと話しをなせば、職人は面白からず、故になるべく廣き問題平等に解る問題を話しの材料として出すべし。又更らに心かくべき事あり。或る家に至りて一事を問

はんとて行くに、家の主婦出で來りて、傍より益にも立たぬ世事を話しかけ、折角聞かんとせし事は聞くの時間なくして歸る事あり。又た客には面白くもなく、おかしくもなき事を、自分に面白ければとて、獨り語りをなすべからず。先づ客の嗜好を探り當て、その得意の處に問題を出し、自分の事を語らんとはなさで、その人の話を聞くヿを目的とすべし。大抵の人は其の得意の事を語りさへすれば、興味あるものなり。殊更婦人は益もなき話しを、くど〱語るが多くして、爲めに人に嫌はるゝヿもあり。又話の要點を一言につまみて語るヿに熱せざる人ありて、うるさき事間々あり。例へば『今日の天長節に觀兵式は御座いましたか』と聞くときは、はい私は未だ一度も見た事が御座いません、大坂でも烏渡雨天でしたから見ませんでした、昨年も風邪で見ませんで、今年こそと思ひて、前夜より髮をとかしたり、衣物の襟をかけ直したりして、樂しんで待つて居りましたに折角行きましたら（此處迄前置）天子樣が御出でがなくて皆々失望して歸りました』。觀兵式の有無を聞くに、その有無は答へずして、長たらしき挨拶をなす人は、度々見受くる處なり、かゝる事は兼ねて心がけ稽古すべき事たるなり。

クリスマスの贈物。

紀念の杖

此の程一人の友人が、獨逸より持來れる杖を見たり。その杖はその友人のためには、價にて易く得べからざる品なりと云ひければ、如何なる高價なる品なるかと、手に取り能く見れば、十錢か廿錢も出したらば求め得べけんと思はるゝ安物に、然かも所々に見にくき彫刻ありて、字の中に黑のぬりたるもあれば、朱のぬりたるもあり、白きもあれば、青きもあり、何の風味もな

くして見るものは何處に價あるやを判斷に苦るしましむ、然るにその人は、今身にも代ぬ大切の品なりと云ふ。不思議と思ひて、今一度能く眺むれば、その杖に彫りたるものは、皆人の名にて、各々その名の異りたるぞいぶかし。さてその杖の由來を聞くに、その人は長き以前より獨逸に遊びたりしが、業終へて故郷へ歸らんとするに、さすがに別れのをしくして、人々涙にくれたりしが、一人の思ひ付きにて、その人の持ちたる杖に小刀持て、己が姓名を書して與へしが、之を見し人、我も〳〵と小刀にて己が姓名をその杖に彫りたれば、その人のためには杖を見る時は友人に遇ふの心地して、懷舊の念に堪へず、その杖こそ身のつれ〳〵を慰め、身の喜びを喜こぶ無二の寶なりと云へり。こは誠に能き思ひ付きなり。凡て贈りものは價の高きを求めず、たゞその人の厚意を記臆すべきものなれば、己が手にて造りたるものは、最も贈ものにはよけれ。されば男子なれば杖に彫刻するもよけれども、婦人なればふろしきに己が名を縫ひとぢて贈らば深き趣あらん。是れよりは追々クリスマスの近づけば贈りものゝ趣向に色々ならんが思ひを込めて贈らばもらひ得たる人の喜びは言語の外ならん。

下女の氣轉、主人の死を救ふ。

昔し周の國に主父と云ふ人ありけり。その妻は良人の留守に隱して犯せる罪ありて、そを良人の知らん事をいたく恐れて暮しける中に良人旅の用を終へて家へ歸り來るとの報に接しければ、妻は待ち受けるとて種々の料理をなし、温かき酒などを用意しをきて、云ひけるは、郎君の遠路の御勞れを慰さめ參らせんとて、かく種々の料理をなしてければ、心安く食し給へと、かくて下女を呼び彼處の酒を持ち來れと命じける。下女

はハイ／＼と云ひながら、酒を取り立てんとして、敷居に蹶つき倒れければ、美麗なる瓶は形もなく破れて、折角の酒、未だ一滴も脣に達せざるに、疊一面に打ち散されたり。良人いかでか怒らざる。即ち腕を振り上げ、力に任かせて下女を打ちたゝけり、妻は折角良人に進めんと、前々より用意して大切に守りたる酒を、かくむざ／＼とこぼしければ、その怒心に滿ち、手を振るはし、足を蹈みしめ、烈火の如き顏色をなして、ありあふ棒を持ち呼吸の根切れよと計りに、下女を打ちたゝきけれども、下女はひたすら己が過にて、誠に申譯なき次第なりと、詫びるのみにて、少しもその虐待を怒らざりき。

久しき後、一の恐ろしき風聞は、主父が近隣に云ひ囃されたり。こはその妻が良人の留守に犯せし罪の良人に顯るゝ時は、己が一命に及ぶを知りて、良人の歸宅を折として、恐ろしき毒酒を盛り、良人を殺さんと計りけるを、兼てその下女が陰かに之を聞き知ければ、その毒酒なるを知りながら、主人に進めて之を殺さんは、その不義妻の惡逆に異ならず。然りとて妻の不義を主人に語りて、妻を殺さんもいたはしければ、大に案じ煩らへる末、遂に頓智を出だして、兩人を一時に助けたるなりと。此事早くも主人の耳に達しければ、主人大に怒りてその妻を去り、さてその下女に向ひ、更らたに結婚を申し込みしかど、下女の身を以て主人の妻となる事、禮に叶わずとて、遂に之を諾わざりければ、之を聞く人下女の賢を稱し、妻にめとらんとする人引きも切らざりしと云ふ。

財を用ふるに付婦人の注意。

みや子

婦人の金錢を得る道は多くは親類の遺産を續ぐか父母

兄姉より與へらるゝ自己の働にて得るか此等の事に可有之候へども、其使用法に至りては其所を得ぬもの少なからず、中には自己の働きにて生活するものさへ往々にして然るものを見受け申候。

或る人は身分不相應なる衣服を求めなど致し候とき、其心中に己れの得たる金なれば自由に費すとも何のあしき事もなき筈なりなど、申すも可有之候へども、人は未來につきての思慮も大に緊要なる事に候。生きとしいけるものは不時に、病にかゝらずとも限らねば、其時の用意もせすはなるまじく、又友達など物見遊山に行くとて誘はれ候時ありとも、嚢中の空しきため、看す〳〵其樂みを缺くに至ることとも可有之候。もとより衣服髪飾など誰しも欲しきものには候へども、終日の勞力を此等の必需ならぬものゝ犠牲に供するは愚かなる事に候。去り迚決して吝嗇にするには及はず、使ふべき所には充分使ひて誰にも後るべきにはあらず候ものゝ、洗濯婆に借金して亡き友の法會に寄附し、或は友人の馳走に己れの温かき衣服を質など致し候は、あやまりたる慈善に候、要するに使ふべき所と使ふべからざる所に確かなる限界を定め置く事必要に候。

人はまづ金錢は多く何れの處に散じ行くかをよく〳〵吟味すべき事に候。多くは滋養にもならぬ菓子に五錢とかつまらぬ見世ものに十錢とか寄附帳に己れの名を記すために一圓とか或は不相應なる美服を製してろく〳〵着ぬうちに流行後れになるとかいふ如く、至つて少しづゝのものと益もなきものとに費す事に候。不必要なるものを買ふものは必要なる時に事を缺き、少しづゝにても度々費すものは大なる不足を生ずるものに御座候。

それ故是非〳〵入用の時に費す外は寶珠のたまか小さき箱になりと入れ置き、又は郵便局とか銀行とか申所に預け置く事宜しく候。

而して如何なる協合ありとも借金と申事は致すまじきものに候、借金は人を束縛せられたる身に致すものにて、道德上瑕となるものに候へば、たとへ些少なりともつゝしむべき事に候。

子供をもちし母の心得

やぎ生

小兒一つ二つのときは、座敷中を這ひ步み、何にても目に遮るものは之れを取りて口に哺み、或は弄び、危險此上なし。されば母は勿論これに傅たるものはよく〳〵注意し、怪我すべき品物は、深く仕舞置くべし。爰に一の話あり、某兒の父鬚を剃るとて、剃刀を研ぎすまし、机の上に置きて便所に入りぬ。小兒は天性奇を好むものなれば之れを見て、直ぐに机の邊へ這ひ行き、剃刀を手に持て、ベロ〳〵と嘗めしが、冷かにやありけむ、顏を顰め居たりける。母は此時臺所にありて晝の仕度を爲し居りしに、兒の音樂頓に止みしかば、さては何かしてけりと、胸打騷きて座敷に到り此形勢を見て、喫驚せしが、大抵の者はすぐに剃刀を取らむとあせり、兒は又やるまじと口中へ突入れ、遂に生れもつかぬ廢人と爲なれども、此母には思慮ある者なれは、戸棚にありし團子を出し、コーレヤコレヤと振りて見せしに、兒は莞爾として剃刀を擲ち這ひ來りしを抱き上げ、舌を撿せしに傷つく所なし。母は胸撫下して團子を與へ、剃刀を仕舞けるとなむ。つまらぬ話、讀むで見れば誰しも承知の事ならむが、さて實地に出會へば、周章て是等の智惠も出てぬものなれば、常によく〳〵心得べし。然しながら刄物其他危き品を、小兒の取易き所に置かざるが、此上なき用心なり。

四五歲の小兒は、稍智惠も附き惡戲を爲すことあれども、親はつまらぬ叱り言して懲し給ふな。是にも亦話

あり、某なる兒の惡戯せしとて、其母は兒の襟を掴み、訓して云ふ、汝かく惡戯すれは此母も仕置の致しかたなし、御巡査さんに遣て仕舞ふ、ッヲ白き着物が見ゆるぞやと、街道へ引出さむとせしに、兒は柱へかじりつき泣て謝せしかば、母も將來を戒めて宥しけり。

ある時此兒遊泳するとて二三の小供と共に、某川に到りて泳ぎしが、未だ熟せざるものゝ事とて、知らず識らず深みへ入り、岸へ出てむと身を百掻きしに、偶此所を通行せし巡査之れを見て助けんと川へ入りしに、兒は巡査を見て、さては連れ行かるゝ事かと太く恐怖て、水の中を逃げ回り愈深き所に入り、遂に溺れて水中へ沒しけり。巡査は辛ふじて兒を引出し、百方手當を加へしも蘇生せざりといふ。

小兒の怪我せしとき、母は之れに驚きて、小兒の氣を落さしめざる樣注意すべし。是れに就ての話は、某なる兒鋭き小刀を持出して、草を切り遊び居りしが、過しく母の所に驅來り、指を切て仕舞たよ、どうしよう〳〵と泣て訴へけり。母は喫驚し戰へながら右か左かと尋ねしに、左だ〳〵と云ふ、母は左なれば二本三本は要らざるものよ、泣くな〳〵と勵せしに、兒は母の驚けるを見て、大怪我ならむと思ひ込み、目を据へ唇の色を變じ食ひたるものを吐き、座敷へ仆れかゝりしかば、母は兒の耳に口を寄せ、心丈夫にせよ、僅かの怪我なり指一本失せても死する事なしと云ひて、藥を貼らむと、怪我せし指を見しに、皮の剝げたる位にて、させる怪我にもあらざれば、母は安心し兒を叱りて、僅の疵なるに指を切て仕舞たと云ひて、此母を驚かせしぞ、馬鹿〳〵し最早血も出でずと、疵所を布にて包み、臥させしに、兒も之れを聞きて心を安んじ、何時か床を拔け出でゝ、遊びける。



禍も三年と云ふ。菌も時候物には有り餘りし時は、何の重寳とも思わず、又貯へて用ふる迄の考は出でざれども、そのめづらしくもなき菌を、翌年の春、もしくは夏の頃に出して料理となさんには、その價金にて買ひ得べくもあらず。

菌の貯方（時候もの）

菌は鹽漬にして貯ふるを普通となせども、その漬方にては風味よからず、凡て菌は風味を以て第一となすが故に松脂を粉にして、鹽に混ぜ漬くる時は、香氣新たに取り來りしものに等くして味も亦よし。

春の梨。

第一法、數顆の梨子のくきを、一顆の梨子の周圍に挿み、暖にして酒氣なく、風の觸れざる處に置けば、久敷保つを得べし。

第二法、損せざる大梨子を擇み、くきを丸なりなる大根にさして、紙につゝみ、暖なる處に置けば、春深き頃迄損せず。

第三法、梨子と梨子の間に、大根を境になし、梨子のすれ合わぬ樣になしをくもよし。

第四法、青梨子ならば、生の赤小豆の中に埋れ合わぬ樣になして置けば、何時までも採りたての如し。

第五法、蟻の吸はざる水梨子を、籾灰の中に入れをくも、長く貯へ得べし。

第六法、梨子を澁紙につゝみて、糠みその中に漬けをくも、長く貯ふを得べし。

料理。

鯛の濱燒

中國を巡視し給ひし人は、定めて知り給はん。三四月頃に魚島とて、鯛の鱗の金色になりて、さながら池の金魚の躍が如き美事なる色となる時候あり、その鯛を取つて濱邊の鹽釜の中にて鹽と共にむし燒になしたるを濱燒と名く、他國の人の未だ味わざる一種の風味を持てり、濱燒は他の燒き方と異なり、蒸し燒の法なれば、鹽を製造なす海邊ならでは出來ざる事なれども、左の如くなす時は、殆ど鹽釜にて蒸せしものと同樣の風味あり。

先づ炮烙に七八分もしくは一寸計の厚さに鹽を布き、其上に木の青葉を並べてしき、其の上に鯛の切身の厚さ五分計りなるものを重ならぬ樣に並らべ、上より仝じ炮烙にて蓋をなし、成るべく氣の洩れざる樣にして、火上にかくべし。餘り猛火なれば、焦け付くるの恐あれども、餘り微火にては、反つて味を損すべければ、その邊の加減大切なり。

鴨味噌のふろふき

味噌と一口に云へば越後味噌も、仙臺味噌も、仝じく味噌なれども、鴨味噌こそ味噌の王とこそ云ふべけれ。その製法は鴨の身を少さく切り味淋にて能く煮付け、少こしいり付くる程にして冷まし、白味噌並に魚の摺り味を少し加へ、小まかに摺りまぜ、後白湯にてトロ〳〵とする位に解かし、ふろふきに用ゆ。ふろふきとは人々の知る如く、蕪若しくは大根を五分四角位に切り、湯出て、その上に先きの味噌をかくるなり。之れはとふがらしを添へて、菓子碗等に用ふ。

婦女職業案內

高等なる內職

前號及前々號の紙上には重に問屋又は製造塲の職業及內職の案內を記し、貧富貴賤の差別なく餘暇あるもの

は必らず職業に就かざるべからざる必要を勸めたり、然れども高貴の人は内職とし言へば何となく世間に憚る所ある如く、問屋又は製造場に内職の仕事を取に行くは耻辱の思ふ人多けれども、こは大なる誤なり、然れども强ちに是等の人を咎むるにも及ばず、他に亙策を是等中等以上の姉妹諸君に勸むべき事あり、开は何なりや。

少しく資產あり餘裕ある一家の妻女又は兒女に好適する内職は種々數多ある中にも最も簡便にして最も體裁宜しきは「メリヤス」機械の仕事なり「メリヤス」機械には目今府下には三種あり、第一絹糸、毛絲、木綿絲の機械なり、絹絲を以て製するものは舶來品に壓せられて製作甚だ尠く府下僅に指を屈するのみ日本橋、横山町に宇喜多といふ家にて盛に織り出す、府下にては毛絲、木綿絲の「メリヤス」織最も盛にして就中木綿絲を扱ふ家は俗に「さらし屋」と呼びて製作隨一なり、其製作品の重なるものは上下シャツ、小兒帽子、肩掛、手甲、靴襪、手袋等なれども素人の家にて單に内職口遣らんとならば、斯の如き種々なる製作品を出すに及ばず、靴襪と手甲位を内職にすれば夫にて澤山なり、靴襪と手甲を製する機械は種々あり、舶來には瑞西製を第一とすれども日本製にて改良小丸と稱する機械なり、代價は一臺三十五圓（芝愛宕町に機械製造塲あり）にして、之に機械用針（大中小あり、絹絲の如き細物を扱ふには小針を用ゐ、木綿は中、毛絲等は大を用ゆ）舶來一本二錢百本二圓、和製は一本一錢五六厘位、此外他に機械を要せず、此機械の力に依れば二三ヶ月間も習練すれば一日毛絲靴襪一「ダース」は慥に製作し得らるゝなり、熟練するに至れば一日二「ダース」を製し得らるべく、製作品を問屋又は小賣店に卸せば目下の相塲にて原料其他の雜費を引去り一「ダース」四十錢内外の利益を爲べし、（但し此機械は口織を爲すこと出來

されば是は他の製造場にて要むるも容易なり、自家にて織らんとならば口繊機械は新にて十七圓五十錢にて購ひ得らる、又織尾の口は他に縫合をする內職人あり一「ダース」三錢位にて容易なり）、然らば三十五圓と其他附屬品の資本を卸すも一日四十錢以上の利益ありとせば最も割好き金利ならずや、啻に割好き金利あるのみならず、身体羸弱なる妻女又は女兒には小座敷の中に一機械を据え置き日々定時の働きを爲さば身體運動には此上なかるべし、機械を動かすは大なる勞力を要するあらず、椅子に倚りて兩手を動かすのみにて足れりとす、職業に志ある姉妹諸君は速に實行し玉へ、三十五圓の機械代は卿等が一春一秋の流行新衣を廢し玉はゞ購ひ得て餘あるべし。



手藝案內。

毛絲の巾着

毛絲巾着の編方は種々樣々ある中に本號には口紐の巾着編方を案內せん、先づ最初に六つか七つかの連鎖一筋を編みて其の終尾の輪と最初の編掛の輪とにフークを通し絲を掬ひて引きしむる時は甲圖の如く圓き環となる、これを製し終らば其連鎖の繼き所より前號

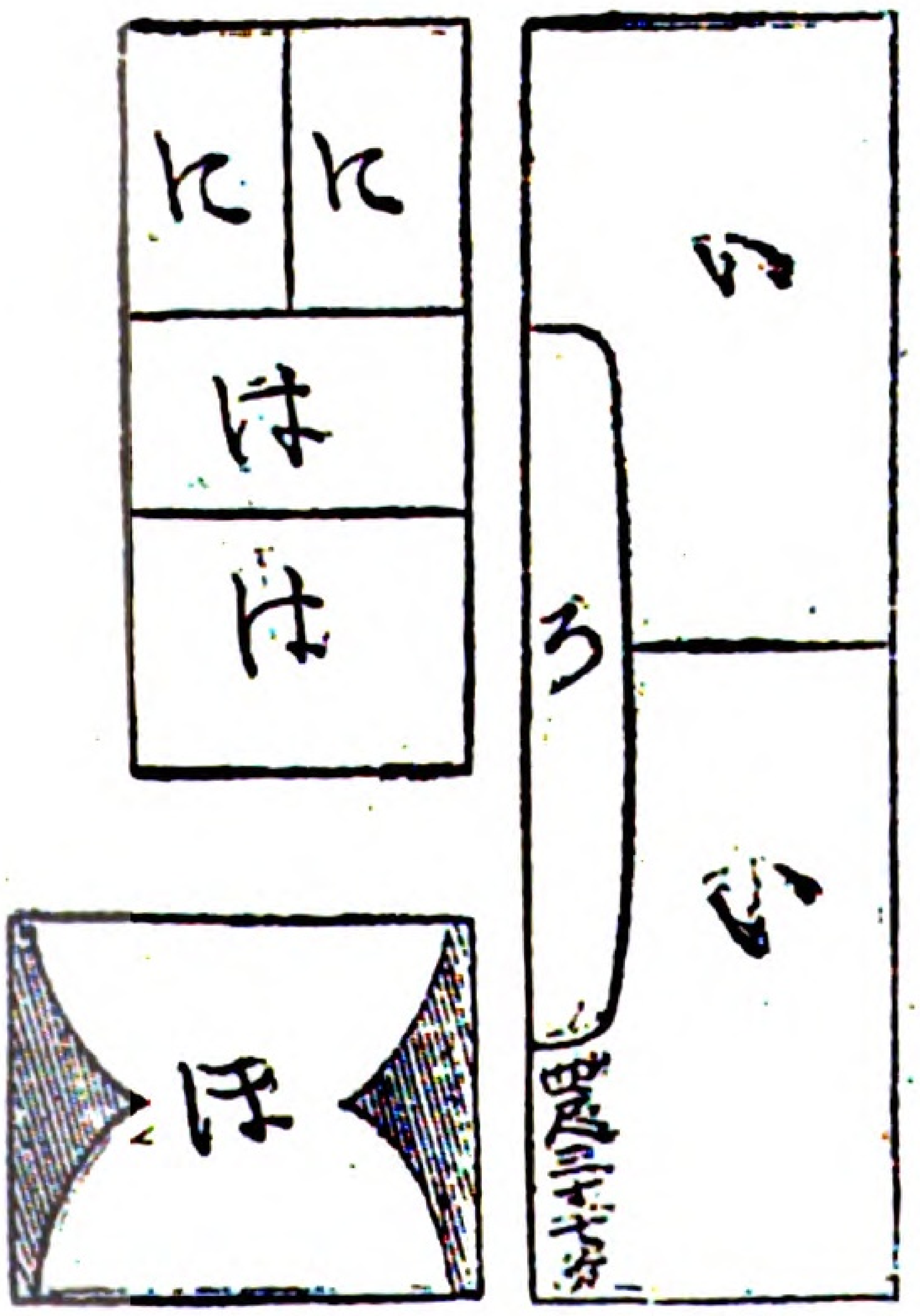


紙上に案內せし如き寄連鎖の編み方の如くに繼き合すべし、其繼合に生せし輪に「フーク」を通し其の次に第二の繼合の所より左の一つ目に「フーク」を通し即ち「フーク」に二つの輪を持つ如く糸を掬ひ二つの輪を一齊に引通し右の如く幾度も環の周圍を編めば乙圖の如

く花形となる、これは巾着の底になるものにしてこれに何なりと好なる編方を用ゐ二段三段四段と編み行かば立派に一個の巾着を製作し得らるゝなり、若し前號に記せし如き鈎編を用ゐば丙圖の如き製作品を得、但し紐を附くるには編終の段の編絲を二つ宛位に內外に縫ふ如くに編むべし、然かる時は口の開閉自由自在なり、毛絲の色は人々の嗜好に任せて可なるも小兒の用品なれば種々の色を取交ぜ成るべき派手に作るを好とす。

被布の製法

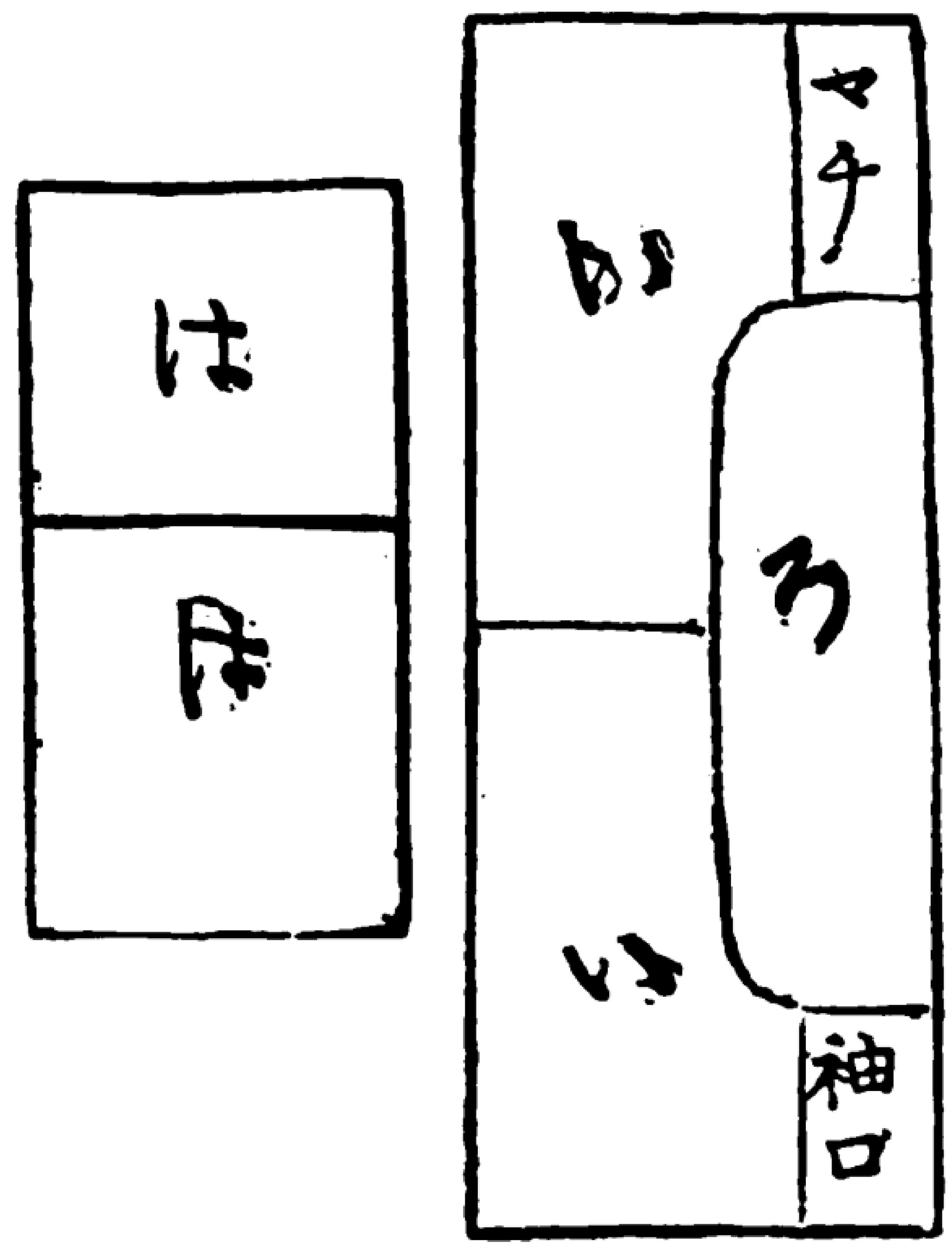
被布は近來男女に係はらず專ら流行するに至れり、今其製法を案內すべし、九寸五分巾二丈八尺の端物を以て本裁に製せんとならば其裁方左の如し、



（い）の二面は身ごろ各九尺（ろ）の處にて袖口と「まち」を得、「えりかた」を二寸八分開とし、（は）は袖各二尺九寸、（に）の前縱襟は各二尺三寸を裁ち去ば、（ほ）の殘餘を剩すべければ、此分にて圖の如き襟を取るべし、斯くして縫ひ合せたる仕立揚は、丈二尺五寸袖一尺四寸袖巾九寸肩巾八寸五分襟丈一尺二寸襟巾一尺袖口八寸身巾八寸前巾五寸五分前下り一寸竪襟丈二尺二寸竪襟巾上三寸五分下四寸襠巾一寸八分の被布一領を得べし、紐は嗜好のものを擇むべし。

女羽織

二丈物にて女羽織一領を製せんとならば左の裁方に倣ふべし、



(い)は身ごろ八寸巾各七尺「えりかた」を二寸九分とし後を三尺二寸とし(ろ)の襟を七尺六寸に取り(は)の袖を各二尺九寸に裁縫せば丈二尺二寸五分袖一尺四寸五分襟七尺六寸の女羽織一着を得るなり。

木綿糸肉色の染法

凡て黒色又は紺色の染法は紺屋の手に懸けざれば充分なる結果を得ること能はざれども他の淡色の染法は素人の家にても容易に試行するを得るなり、左に木綿の染法を記さん、

木綿は何人も知る如く本邦又は亜米利加、印度、埃及等の熱帯地方に多く産出する植物より得るものにして其素質中に蠟質を含有し居るゆゑに染法他の絹絲又は毛絲より遙かに困難なるものなり、先づ木綿絲の晒し法より記せば、一器中に三分の二の熱湯を盛り、熱湯二升五合毎に晒し汁(晒し汁の製法は「クロリン」石灰百匁を磁器に入れ先づ少許の清水を灌き入れ乳棒にて石灰の塊を搨り潰し再び少許の清水を灌ぎ能く混和せしめ斯の如くすること數十回に及び而して後清水二升五合を灌ぎ其の溶したる液を硝子壜又は磁器に移し其口を密栓して使用に供ふべし)三合七勺五抄を灌き入れ、能く混和せしめて木綿糸を浸すこと半時間許にして取り出し、他の器に水を滿たし、水五升毎に硫酸五勺を灌き入れ充分に攪亂し、取出したる木綿糸を

其器に浸すこと十分時間位に止め、然る後清水にて洗ひ清め、染方にかゝるなり、

肉色の染法　一桶に水を滿し別器にて醋酸鉛三十匁を溶して之を備え置し桶の中に灌き入て能く混和せしめ晒たる木綿一貫目を浸すと五十分時間にして取出し、水氣を絞り去り、更に「クローム」十五匁を溶したる別桶の水に右の木綿を浸すこと十分時間に止め又取り出して水氣を絞り、又醋酸鉛の汁液に浸入せしむること十分時間にして取出し清水を以て洗ひ清め水氣を絞り盡して乾かせば、近頃流行の肉色を得べし、其他の簡易なる染色法は他號に記載すべし、但し藥品は藥舖に行かば容易に購ひ得らる。



社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

身體

沐浴——朝起る時は單に眼のみを洗ふを以て足れりとせず、一日に一回は充分に全身を拭ふを要す、身體を拭ふには海綿を用ゐず手を以て皮膚に水を灑ぐを良策とす、水は雨水又は蒸溜水を最可とす、石鹼は十分に使用して直ちに洗ひ落し柔軟なる手拭を以て皮膚を能く拭ひ乾かし、後に肢體を強く摩擦すべし、摩擦の方法は顏面肢體より眞紅色の顯はるゝを適度とす、此浴方は實に簡易にして唯少量の微溫湯と一箇の石鹼一巾の手拭を用ゐるに止り何人も容易に爲し得べき簡便法なり、又時々熱き湯に海綿を浸し、體軀より脂汁を拭き去るを要す。

日光及び空氣に觸るゝは健康上殊特の沐浴法なり、故に衣服を着る前に暫時身體を日光に曝すも亦一法なり、

呼吸——は身體中肝要なるものなれば常に適宜の運動を試み新鮮の空氣を呼吸すべし、而して呼吸に惡臭を帶ぶるものは胃、齒、肺若しくは咽喉等の病症より起るものなれば必らず深く注意し置くべし、呼吸の臭氣を療する一時の法は咖啡、肉桂、丁子等の香料藥品を用ゐて

可なるも惡臭甚しきに至らば必らず醫者の療治を乞ふを宜しとす。

皮膚——美麗ならしめんとならば必ずしも紅粉を用ゐるに及ばず、新鮮なる空氣中にて充分の運動を爲し又浴湯の際十分に皮膚の氣孔を開き健康を助くる飲食を爲し、十分に睡眠を爲すにあり、決して鉛粉等の重量顔料を用ゐるべからず、最も輕料の顔料に至りては用ゐるも亦可なり、面皰の生じたるが如き事ある時は重炭酸曹達十八瓦と香水六滴を混じたるものにて顔を洗ふべし、皮膚蒼白き時は微温湯にて洗ひ粗き手拭をもて十分に摩擦し空氣と日光に觸れしめて適宜の運動を試みるを要す、又肌の荒れたるものは夜間「グリスリン」を塗抹し翌朝清水と善き石鹸とを以て洗ひ去るべし、皮膚を美麗に保たんとならば豚肉乾酪其他多量の脂肪質ある飲食物を謹むべし、

手——手を美麗に保たんには種々の方法あり、強き勞力に係はらざるものは甚た簡易なり、即ち石鹸を十分用ゐて好く洗滌し爪刷毛を用ゐて屢々洗へば必らず清潔となるなり、皺等の生じ易きものは毎夜就寢前に「グリスリン」をもて洗ふを可とす、冬日には雪と石鹸を以て手を洗へば光澤を増すこと妙なり、手を極めて白く美麗ならしめんには二三日越に牛乳と清水とにて屢々洗ひ就寢前に棕櫚の油を塗り毛製の手袋を嵌め翌朝温湯と石鹸とにて洗滌すべし、日光の爲に手の燒けて黄色を帶ぶるに至らば石灰とレモン汁にて洗へば二三回にて舊に復するなり、然れども手は美麗に保つを要すと雖も若し怠惰にして美麗なるは十分働きて美麗ならざるに如かざるなり、

足——足も能く保護するを要す、之を善保せんと欲せば十分清潔にせざる可らず、清潔の法は一日に一回宛洗足すれば中分なれども一週間に少くとも三度は必らず行ふべし、靴襪は屢々取替ゐ、殊に多く歩行せし時は屢々取替ゆるを要す、洗足を怠る時は忽ち不快の臭氣を放ちて人に厭はるゝことあり、必らず洗足に注意すべし、洗足は温湯を用ゐ十分能く拭ひ去るを要す、

毛髮——已に本紙上に記載したれば茲には略す、

齒——齒は毎朝餐後齒楊枝を用ゐて清潔にすべし、食事後毎に齒を清むるは此上の良習なり、齒並よく清潔にするには時々「カチール」石鹸を用うるを良とす、齒楊枝はゴム製を用ゐ齒を横に磨くより竪にするを良策とす、齒齦の溜りて除き難き時、若しくは齒の欠損したる時は速かに齒醫者に就きて治療を受くべし、

目——目の隅に塵垢の集るを見るは誠に見辛きものなり、顔を洗ふまでに汚物の出ることあらば柔軟なる手巾もて靜に拭ひ去るべし、目は五官中最も大切なるものなれば必らず清潔に保護するを要す、

耳——日々沐浴の際耳孔を洗滌し耳液の出ることあらば靜に之を拭ひ去るべし、

鼻——鼻液又は其他の汚物の附着し居らざるやうに清潔に保つべし、

鬚髯——男子にして鬚髯ある人は奇麗に生やし置き、無ければ奇麗に剃りて置くべし、

爪——爪を生やし置くは禮にあらす、必らす剪み去るべし、爪に黒き垢等の附着しあるは餘り見善きものにあらす、

正しき習慣　人々清潔さ健康を保たんさ欲せは須く身體に係る習慣を十分正しく守ることを心懸ざるべからす、即ち訪問、旅行又は就業より睡眠上厠、沐浴、飲食等の瑣事に至るまで不秩序ならざるやう心するを肝要さす、禮法は秩序なり、秩序は自然の理なれば若し之に背けば自然の禍を醸すべし、人の疾病に犯さるゝは知らず識らず自然の理に背き、秩序を失ふより起るものなり、豈謹まざるべけんや、

流行の栞

春夢

冬着

男物羽織——第一は市樂にして紺地鼠の大名、萬筋、木賊崩、煉瓦崩し、微塵筋等總じて地味なる縞柄最も當人あり、次は例の繋糸織にして淡泊なるは商人的の結城紬なり、而して縞柄地色さもに地味なるを可さす裏は緞子最も流行にして他は無地の甲斐絹さ知るべし、書生羽織に至りては彼の大島紬を流行の冠さす、若し高尚的に好まば例の市樂織の淡色縞を撰み、これに緞子の裏を着けて眞綿を五十目ばかり容れて丈けを普通の袷羽織さ同樣に仕立つべし、これ流行第一等。

男物小袖——若し地味に調へば上着を寄糸織か若しくは市樂織の紺地、鼠縞の上着に下着二枚を淡色の糸織を胴拔にして三枚重ご爲すべしの次は市樂淡色の上着に同じく一樂の風通織か若しくは御召の小紋織を胴拔二枚下着に仕立、紳士好みに三枚に着すれば高尚言はん方なし、他は大縞の下着に結城紬の上着を合せて二枚重又は三枚重に着すべし。

婦人羽織——京御召の小紋に綿を少し多分に容れ、丈は矢張り短き方流行す、此外は皆紋附羽織なれば次號に讓る、

婦人小袖——三枚重に調製せんさ欲し、意氣にして高等にして且つ品格なるを好まば上着を小紋御召にして下着二枚を矢張同樣の小紋を合すべし、而して裾廻しは素鼠、櫻鼠、利久等の縮緬をつけべし、其次は縞御召の上着に更紗縮緬の二枚を下着さして裾を花色絹に撰めば先づ一通りの流行品さ知るべし、次に少しく安直なる物に撰めば上着を山糸織にして下着を更紗絹か又は小紋絹さすべし、但しこれは二枚重なり、

平民的——銘線も可、秩父縞も可瓦斯双子も可、瓦斯結城、瓦斯市樂も可、通常の双子縞は專ら實用向さ知るべし、

價格——原價は夫より騰貴したれども實價は本紙第十四號袷の案内に記載したる價格さ差して異動なし即ち御召紋織（自十一圓五十錢至十二圓五十錢）、光輝織（自十二圓至十三圓）、京御召（自七圓五十錢至九圓）、市樂織（自九圓五十錢至十三圓）、糸織（自六圓半至九圓）、山糸織（自

四圓半至五圓半)、節糸織(同前)、銘綫縞(自三圓至四圓半)、秩父縞(自二圓五十錢至三圓)、瓦斯糸類(自一圓三十錢至二圓半)、通常双子(自六十七十錢至一圓內外)、小紋縮緬(自六圓半至八圓)、更紗縮緬(自六圓半至八圓)、花色絹(自五圓至七圓半)、以下略す、

菊花の流行

一昨年頃より都下には菊花栽培の流行甚しく近年は西洋諸國の好菊家は爭ひて種子を我國より得て盛に栽培に熱心すれば、其本家本元なる日本に於て流行の旺盛を極むるも亦理なきにあらず、本年都下に於て最も有名の花壇菊を有するは麹町六番町福羽逸人邸、麻布市兵衛町溝口伯邸、同區西町今井邸、廣尾町笑花園、芝二本榎上行寺、目黒花房邸、品川坪井家、根津田村邸等重に有名なるものなり、而して如何なる栽培法かといふに大抵は三間の花壇に九株宛三列に植ゐ「びんさし」は一株に十五の花を持たするを常とす、花の支柱は篠立第一の流行にして「ピンサシ」之に


びんさし


しのだて

次ぐ、屋根は油障子又は茅を用ゐ周圍は篠又は葭簾を用ゐ板を用ゐることなく、手欄は青竹を用ゐるもの多けれど風流木を遣ふ處もあり、前列の菊より手欄までの距離は三尺を常とす、花壇に女松葉を敷くは地の新なるにあらざれば必らずしも之を用ゐず、又花壇に美麗の幔幕を張る風一般に行はるれども是れは却つて此風流と隱逸の趣を妨ぐることなきを保せず、都の人士は唯に花壇菊に目を注ぎて一本立の山立を顧るに遑なし、山立は唯た僅に廣尾笑花園の中流の橋を越ゑて右手の方に見ゆるはこれなり、

新形指環





近來松田尾張町白牡丹にて新に工夫したる新形指環は曾て前號にも記載したる專賣品前髮止に倣ひ、上圖の如く三つに折れ、折目は管を以て繋ぎ大小伸縮自在にして意匠甚だ面白し、一寸取はづし見れば根懸の如き觀あり當時追々と流行の域に進みぬ、而して其代價はアルミ臺金鍍八九十錢銀臺本「メッキ」一圓五十錢純金十二三圓其他は望に依り、

島田懸と兒懸け

島田懸には種々なる流行品あるが中にも近來頗に流行し始めしは絹の七子丸打にし

て房の裏に金具の鐶を嵌め房は孰れも美麗なるものを附す、色の流行は藤、肉、鶸、紅等第一位を占む、價は十五錢位の處最も賣口好し五つ七つの女の童の頭に美しく飾らるゝは幽禪染丸ぐけのちご髷けなり、可憐なる房附にして一個二三錢にて購ひ得らる、安い流行品ならずや、

懐中七つ道具

辨慶が五條橋の七つ道具にあらず、これは心懸よき貴女達が懐中に秘め置かるゝ七つ道具なり、少さき楊子や、鋏刀や鑢子や小刀や、凡て少さき嚢の側に藏り他に出でゝも一寸身の廻りに不自由なきやうの工風にして敢て今日始りしものにあらねど昨今彿々兒女の間に行はる、價は二十五錢より五十錢位まで、



日用品物價　（十一月二十一日）

⊙白米（一圓に付き）●一等白米八升五合●二等白米八升七合●三等白米九升●四等白米九升五合●五等白米九升九合
⊙雜穀（一圓につき）●本實大麥三斗五合●脇場大麥三斗一升五合●裸麥一斗一升●佐野割麥一斗八升●同次割麥一斗九升五合●同下割麥二斗二升●上等竹林麥一斗七升●中等竹林麥一斗八升●下等竹林麥二斗●上小麥一斗八升●同脇場小麥二斗●佐野搗粟一斗四升五合●下總搗粟一斗六升五合●向地蕎麥二斗九升●山亮蕎麥二斗四升●亮粟二斗八升●亮黍二斗六升●常陸黑胡麻一斗五升●山稗五斗二升●常陸稗五斗五升●室閣黑豆一斗七升●同鶉の子豆一斗五升●本場豌豆一斗六升五合●脇場豌豆一斗七升●栗橋空豆一斗七升●下總空豆一斗八升●讃岐空豆一斗八升五合●庄内黑平大豆一斗七升●仁川上大豆一斗七升五合●新南京青大豆一斗八升八合●新南京大豆一斗八升八合●栗橋青大豆一斗七升●脇場青大豆一斗七升五合●五社大豆一斗八升●青柳大豆一斗七升●並大豆一斗八升五合●上海大豆二斗●新室閣小豆一斗三升●南京小豆一斗四升●秩父大納言一斗●向地大納言一斗一升●南京白小豆一斗四升三合●柏壁色滯小豆一斗三升五合●中手小豆一斗四升●並小豆一斗四升二合●吟小豆一斗三升五合●目黑白サ一斗一升●目無白サ一斗●向地金時一斗五升●達磨金時一斗二升五合●室閣隱元一斗●銚子隱元一斗三合●更紗隱元一斗五升●鶉隱元豆一斗六升
⊙鹽（一圓に付）●赤穗四俵●大鹽四俵五厘●八家四俵五厘●本齋六俵●新齋六俵八分●古積上二俵九分●同中三俵五厘
⊙醬油（一圓に付）●最上七分二厘より七分八厘●極上八分三厘より九分三厘●上物九分八厘より一樽二分●中一樽四分より一樽五分迄●並品切

雜　錄

遺珠顆々

教授と教育　　フレデリツキ、ロバアトソン

○教授は教場に終る、然れども教育は唯生命と共に終る、教育とは天性を開發し、善を强ふし、惡に克ち、自助の精神を與へ、一個の人間を造るの謂なり、

一事をよく爲せ　　ウオシントン、グラツデン

○「余は四十事にかゝづらふ」と云はんより「余は此一事を爲す」と云はんは遙に優れり、

人さ人　ピーチャル

○人の此世に相逢ふや恰も船の海上に相逢ふが如し、相逢ふは唯是れ瞬刻の間、一たび去れば大海茫々復見る可からず、舟々相呼ふは此瞬刻の間に於てせざる可からず、左れば我等も人に對する毎に常に之を觀し若し必要あらば互に助力を與へざる可からず、

談叢。

一葉の紙

一葉の紙も亦是れ限りなき辛苦の結果なるを思はゞ、世に棄つべきものとてはあらざらん。昔水戸義公がいたく紙を吝みたりしも實に〱これは道理ぞかし。古老の物語に傳ふらく、水戸義公は身徳川の親藩に主とし、賢名一世を傾け、勢威時に隆々たりしが、極めて質素にして苟くも奢侈がましき事なく、紙の如きはとりわけて、其吝む所なりし』と。去れば彼は其家を兄の子に讓りて西山に隱居したりし後の如き、他より來れる書柬の裡紙は之れを揃へてつがせ置き、詩歌の草稿は皆これに書きぬ。若し又水などの疊の上にこぼるゝことあらん乎、彼は常に布木綿のきれ等にて之を拭はせ、決して紙もて拭ひ棄ることを許さゞりき。去れども奥女中などなほ紙を費すこと多かりければ、彼は數多の女中を紙すきを觀るべく松の川といへる所につかはしける。

唯見る野末を流るゝ一條の川は、寒水落ちて石出で、霜白く、草枯れ、刄の如き寒風、枯枝を吹きてヒユー〱と鳴りぬ。而して此の冬の川邊は、水の上に一塲の桟敷作られ、あらき簀に莚うすべりを敷き、四方は吹きはらひて何の掩へるものもあらざるに、宮殿深く鎖して常に煖かく着且つ火桶を擁したりし彼女等は、一日樂しくも可笑しくもあらぬ紙作りを觀るべく此の桟敷の上盡日置かれぬ。

而して工人の男女は皆水中に入りて立ち働らき、脂の

色さへ赤黑みて其辛酸いわんばかりもわらず見えき。」彼等は皆其辛酸の、狀を見たればとて歸らんとしけれど、よく〳〵觀るべしとの事にて許されず、黄昏に至りて始めて歸りぬ。義公曰く『紙を作ること此くの如くそれ艱難なり、爾來はみだりに之を費す勿れ』と。彼女等の紙を費すことの數はこれより大に減じたりといふ。

時事一斑

國民の聲

帝國議會は本日を以て東京に召集せられたり。新らし橋畔車聲轆々、帽影婆娑、於戯丕休なる爾國民の聲を揚げよ。

世界大博覽會受賞者

（シカゴ世界大博覽會の受賞者は獨逸第一にして、日本第二なりと聞く。誰か日本人を劣等國民と謂や。

婦人矯風會雜誌

曩日東京婦人矯風會が發起し、日本全國に於ける矯風禁酒の主義をとる各婦人會を聯合して日本婦人矯風會を設立せしが、今や之が機關たる婦人矯風會雜誌の初號を發行するに至れり。吾人はこゝに滿腔の喜を以て此の好侶伴を得たるを賀し、偏へに其健全なる成長を祈るなり。

講和

辻伊澤二氏文部大臣と講和す。

梅花先春

新年の御歌會は歌題を仰出されぬ、曰く『梅花先春』。

秋千種

東都近郊秋樹に滿てり、黄葉紅葉自から千種。古今集の詩人嘗て之を歌ひき、

白露のいろはひとつをいかにして
秋の木の葉をちゞ染むらむ。

家庭雜誌

◯毎月二回十日廿五日發兌

定價

一冊	金五錢	郵税 金五厘
半年（十二冊）前金	五十錢	地方 金五十六錢
一年（廿四冊）同	金一圓	共 金一圓十二錢

◯廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

◯本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷者　堀田純郎

編輯者　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍印行